古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 233 号（2022 年 4 月）

宣教師的語学者・渡部薫太郎－石濱シューレの人々（1）[1]

長田俊樹

1．はじめに

東洋学者石濱純太郎は 1923 年に大阪東洋学会を創設し、1927 年には静安学社を設立した。さらに、1942 年には大阪言語学会を創立発会した。

筆者はこれら三つの学会の活動と戦後、石濱が設立に関わった浪華芸文会、ウラル・アルタイ学会を加えて、「石濱シューレに集う人々」(長田 2022c)としてまとめた。このうち、大阪言語学会の活動について、『大阪言語学会要覧』とともに紹介し(長田 2021)、エスペラント語で書かれた『大阪言語学会会報』を翻訳紹介してきた(長田 2022a)。また、静安学社の講演についても長田(2022b)として発表した。

このシリーズでは石濱シューレの人々として、石濱が設立した諸学会・研究会で活躍した学者を取り上げたい。

その第 1 回として、渡部薫太郎について述べる。渡部は文久元(1861)年 9 月 20 日、奈良県に生まれた。石濱の 27 歳上で、石濱シューレと呼んでいいものかどうか悩んだが、石濱が最初に創設した大阪東洋学会での活躍、そして渡部が亡くなったときに、石濱が追悼文(石濱 1936)を書いていることから、「石濱シューレの人々」として顕彰することとした。

渡部の生涯を振り返る前に、大阪東洋学会が出版していた『亜細亜研究』をもう一度みておこう[2]。タイトルの後ろに(国会)と記したものは国会図書館デジタルコレクションのサイトから、また(関大)は関西大学デジタルアーカイブのサイトから、それぞれダウンロードして読むことができる。

第一号　小倉進平「新羅語と慶尚北道方言」(1924 年 6 月)(国会)
第二号　伊徳均「蒙語動詞の活用と其種類」
　　渡部薫太郎「満洲語女真語と漢字音の関係」(1925 年 2 月)
第三号　渡部薫太郎「満洲語図書目録」(1925 年 3 月)(国会)
第四号　ニコライ・ネフスキー「西夏文字抄覧 ： 西蔵文字対照」(1926 年 3 月)(関大)
第五号　中目覚「独訳ニクブン文典 Grammatik der Nikbun-Sprache (des Giljakischen)」(1927 年 3 月)
第六号　浅井恵倫「馬来半島に於ける馬来語音の地方的差異に関する若干の考察」(1927 年 11 月)
第七号　渡部薫太郎「満日対訳仏説阿弥陀経」(1928 年 10 月)(国会)
第八号　中目覚「独訳オロツコ文典」(1928 年 11 月)(国会)
第九号　渡部薫太郎「満洲語綴字全書」(1930 年 3 月)(国会)

---

[1] 小論執筆にあたり、伊藤英人専修大学特任教授、竹越孝神戸市外国語大学教授から草稿を読んでコメントをいただいた。名をあげて感謝する。

[2] 長田(2022b)ですでに触れたが、新たに関大デジタルアーカイブからダウンロードできることを付け加えている。

第十号　　中目覚「気候と歴史」(1932 年 6 月)(国会)
第三号　　渡部薫太郎「増訂満洲語図書目録」(1932 年 10 月)(国会)
第十一号　渡部薫太郎「女真館来文通解」(1933 年 10 月)(国会)
第十二号　渡部薫太郎「女真語ノ新研究」(1935 年 1 月)(国会)

十二号のうち、渡部は 7 冊に執筆し、「満洲語図書目録」については増訂版も出版している。

渡部が活躍したのは執筆者としてだけではない。筆者が確認したところでは、第 2 号から第 12 号まで編輯兼発行者として渡部の名前が記載されている[3]。日本語で書かれたものは活字が使われているが、満洲文字や女真文字などを含む『亜細亜研究』は、すべて鉄筆でガリを切って謄写版として出版されている。ネフスキー「西夏文字抄覧 ： 西蔵文字対照」に掲載された西夏文字も、渡部が鉄筆を振るった謄写版での出版である。

渡部の活躍があってはじめて『亜細亜研究』を十二号まで出版することができた。そのことを「はじめに」で確認しておく。

小論ではこれまで論じられることがなかった渡部の論考を紹介する。また渡部自身が語る、これまであきらかでなかった前半生記を振り返り、渡部薫太郎の実像に迫りたい。

２．渡部薫太郎の生涯

石濱純太郎の追悼文の冒頭にこうある。

渡部薫太郎先生は本当はワタナベ･シゲタロウと読むのであるが､クンタロウと人の言ひ習はすまゝに著書の羅馬字題簽に為つてゐるのもある。よく世に有る例なので、先生も闘はれなかったのかもしれない。(石濱 1936:92)

渡部薫太郎の名前に関していえば、後で述べるように、渡邊薫太郎名での論文もみられ、名字の漢字や名前の呼ばれ方にこだわりがない人だったのかもしれない。

それでは、この石濱の追悼文と上原久[4]の「渡部薫太郎の満洲語学(1)」(1965)によって、渡部の生涯をみていこう。

上原(1965:1-2)には渡部薫太郎の略歴が表になっているので、それにしたがって表にしておこう。ただし、年号は西暦で統一しておく。また、年齢は数えで上原の表にしたがった。なお、上原(1965:2)によると、この略歴は大阪外大にあった履歴書から抜粋したものである。

年号	出来事	年齢
1880 年 8 月～1882 年 5 月	大阪川口英語学舎に於て英語を学ぶ	20-22
1883 年 1 月～1887 年 12 月	大阪川口三一神学校に於て神学及び英語を学ぶ	23~27

[3] 第 1 号の編輯兼発行人は堤正雄になっている。また、第 2 号の編輯兼発行者は渡邊薫太郎の名前になっている。後述するように、渡部薫太郎は渡邊薫太郎の名前も使っているから、2 号以降はすべて渡部薫太郎による編輯兼発行である。

[4] 上原久(1908-1997)は東京文理大で言語学を学び、建国大学、埼玉大学で教鞭をとり、満洲語を専門とする言語学者である。

1899 年 5 月	通信事務員となる。	39
1902 年 8 月	通信書記補に昇格。	42
1903 年 12 月	官制改革により廃官。	43
1904 年 2 月	陸軍通訳となる。	44
1907 年 3 月	御用済につき免官。	47
1907 年 8 月~12 月	朝鮮軍司令部より浦塩地方へ特別任務につき派遣。	47
1908 年 2 月	間島に入り写真業を開き、且つ満人或蔚[5]に従い満洲語を学ぶ。	48
1909 年 8 月	北鮮日報間島通信部嘱託。	49
1919 年 4 月	龍井村居留民会書記となる。	59
1920 年 8 月	大阪朝日新聞間島通信部嘱託。	60
1920 年 10 月	京城日報間島通信部嘱託。	60
1921 年 6 月	書記長依願退職。	61
1921 年 12 月	在間島朝鮮人指導のため、朝鮮総督府より警察事務嘱託。	61
1922 年 9 月	私立永新中学校の日本語教授嘱託	62
1924 年 5 月	永新中学校講師、朝日新聞・朝鮮日報の通信員辞職	64
	大阪外国語学校講師嘱託	64
1925 年 6 月	満洲へ出張	65
1935 年 7 月 22 日	講師在職のまま死去。	76

石濱の追悼文で、渡部の生涯を若干補っておく。

信仰上から宣教師になるつもりであったらしいが、何かの事情があって俗務に従事せられる事となり、(明治)二十二年(＝1889 年）[6]東京郵便局に勤務せられた。然し日露戦役に際し起って陸軍通訳となり、戦後功を以て勲八等に叙し瑞宝章を授けられた。(石濱 1936:92)

渡部の略年譜にある「通信事務員」及び「通信書記補」というのと、石濱が示す「東京郵便局に勤務」との関連がわかりにくい。

東京中央郵便局の沿革をウィキペディアでみると、1871 年に四日市郵便役所として発足後、翌年には東京郵便役所と改称され、1886 年には東京郵便局となる。さらに、1889 年、東京郵便電信局となる。つまり、渡部が「東京郵便局」に勤務というのは「東京郵便電信局」をさしている。

略年譜の「官制改革により廃官」は以下のことをさすものと思われる。

1903 年（明治 36 年）

4 月 1 日 - 通信官署官制の施行に伴い、東京郵便電信局が東京中央郵便局と東京中央電信局に分割される。

---

[5] 渡部(1918:4)によると、「満人成蔚氏」とある。上原(1965:1)が履歴書から引用したものは「満人或蔚」であり、どちらも原文のまま掲載している。この違いを指摘してくださったのは竹越神戸市外大教授である。名をあげて謝意を表したい。

[6] （　）の西暦などは長田が追加した。以下の引用文でも適宜追加している。

12 月 5 日 - 東京中央郵便局、東京中央電信局、東京中央電話局を廃止統合して、再度、東京郵便局になる。

「官制改革により廃官」が 1903 年 12 月なので、この廃止統合と関連したものだったのだろう。

「通信事務員」及び「通信書記補」に関連していえば、1898 年 11 月 1 日に「逓信省官制改正(郵務・電務の 2 局を合併して再び通信局とし、監査局を廃止)」[7]と官制改革があり、その通信局に関連する仕事だったと思われる。その推測が正しいとすれば、1889 年から東京郵便電信局にずっと務めていて、1899 年から通信局に配置換えになったのではなかろうか。

これで神学校卒業後の略歴が埋まったことになる。

渡部が日本に帰ってくることになった理由については、石濱によると、「(大正) 十三年(1924 年)に中目覚に聘せられて大阪外国語学校に赴任して満洲語を講ぜられる事となり」(石濱 1936:92)とある。中目覚[8]は当時の大阪外国語学校の校長で、うえでみた『亜細亜研究』を出版していた大阪東洋学会の会長でもある。

小論は渡部薫太郎のキリスト教信仰に焦点をあてる。

それは第 4 章でみる渡部自身の文章によっている。しかし、それだけでなく石濱の追悼文に以下のような指摘があったことも大きい。

昨年頃から時々身体の違調を訴へられ、自身にも或は起つ能はざるに至らんを覚悟されたか、熱烈なる信仰は初めより絶えて変らなかったが、教会堂へは嘗て出掛けられなかったのを、遂に宣教師を招いて特に聖餐を受けたり後事を依頼されたりなどして、今昭和十一(1936)年七月二十二日には寓居にて七十六年の清き生涯を終へられたのであった。(石濱 1936:92)

渡部薫太郎の業績については、石濱の追悼文中に、「渡部先生論著目録」(石濱 1936:94) がある。また学問的評価、とりわけ満洲語学については上原(1965・1966)がある。専門外の筆者が付け加えることはない。しかし、石濱による「渡部先生論著目録」から漏れた論文があり、それらから渡部薫太郎の生涯にアプローチしてみたい。

３．大和民族之故国私考(1893)

1893 年、田口卯吉が主幹を務める『史海』に「大和民族之故国私考」という論文が掲載された。これが渡部薫太郎の処女論文と思われる。当時、渡部は東京郵便局に勤務していたとみられる。

田口卯吉(1855－1905)は経済学者であり、歴史家であって、衆議院議員も務めた、典型的な明治の知識人の一人である。「日本語＝アリヤン語族説」を唱えたことで知られる。その田口が主幹として、1891 年から 1896 年まで出版されたのが『史海』である。田口の吉田東伍・平出鏗二郎との論争や久米邦武の筆禍事件などを起こした、曰く付きの史学雑誌である。

この渡部の論文は日本とユダヤを結びつける論考である。この渡部の論文をご教示くださったのは、

---

[7] 日本電信電話公社関東電気通信局『関東電信電話百年史. 上』(1968.03)の年表が以下のインターネットサイトに掲載されていて、それを引用した。
https://shashi.shibusawa.or.jp/details_basic.php?sid=13310

[8] 中目覚については長田(2022b)でふれたので、そちらをご覧ください。

日本とユダヤを結びつける「トンデモ」話を追っていた畏友井上章一・現日文研所長である。1995年7月、長田が日文研共同研究会で「石濱シューレ・露人日本学者・言語学界三大奇人」と題して発表した際、渡部薫太郎に触れ、その発表を聞いていた井上章一からこの論文のコピーをいただいた。それが四半世紀経て、ようやく日の目を見ることになったのは望外の喜びである。井上所長の名をあげて、感謝申し上げる次第である。

では、その論文を以下に引用する。ただし、Schaub と Edkins の漢文による原文は除いている。小論は渡部薫太郎について述べるものであって、ここで漢文を引用して彼らの「トンデモ」説を紹介する意味をみいだせないからである[9]。

我が大和民族は元と西部亜細亜の地方に住せし希伯来人若くはこの種族と多少交通し且つ阿非利加人と交渉せし者なる可し、而してレヴエレンド M. Schaub 氏の説をして真ならしめば、紀元前千百二十年前後に於て支那民族は既に外国と交通せしとあり、又夫より凡百余年を経て希伯来人の王ソロモン船舶を造りツロ王ヒラムの舟子を得て印度地方に貿易を試みせしめしともあり、尚ほ紀元前七百六十年の頃猶太人は其京城に於て秦シニム人に接せしともあり、又ドクトル Edkins 氏の考証を以て実ならしめば、支那人の波斯西部の民族と交通せしと明なり、然れば何れにしても我が民族は此交通の便を得しより、故国を離れ漸々東方亜細亜に来り、支那海を経て終に九州の地に上陸せしとなる可し、故に我が民族の内に西亜細亜の風俗習慣等の相似たる者あり、又彼のワニ（鰐）なる言葉の稍阿非利加の原形を転じても存せるは敢て怪とするに足らずとは、これ余輩の大和民族の故国に就て信ずる所なり、余輩の斯く信ずるに到りし所以の者は、蓋し両氏の説を探り、後我が風俗習慣及器具等、彼此対照して得たる結果なれば、今暫く両氏の意見を摘戴して大家の瀏見に供し、併せて教を請ふ、

エドキンス氏の著聖教所載諸国見千漢書考、條支国　此書は上海刊行にして漢文を以て記せり。載せて二約聖書釈義の中に有るなり

(漢文部分略)

M. Schaub 氏著　古国憑経　此書曰く二約聖書釈義の中に輯せらる

(漢文部分略)

余輩思ふに邦語ワニは阿非利加語の転訛なる可しと、千八百九十一年英国刊行Charchman almanack 中 The bridge over the wami と題する図を見るに、黒人物を戴きて吊橋を渡り鰐魚人窺ふて水中に跳るあり、此に由て考ふるに余輩はワニはワミの転訛にして其の語遠く阿非利にあり、而して我が邦にもこれに類する例あり、大和北部に村あり、其名を二名と云ふ、村人等ニと云はず、訛りてジと呼ぶ、ワニワミも此の類なる可し。(渡部薫太郎 1893:102-104)

最初の「我が大和民族は元と西部亜細亜の地方に住せし希伯来（ヘブライ）人若くはこの種族と多少交通し且つ阿非利加（アフリカ）人と交渉せし者なる可し」の一文が渡部が主張する論旨のすべてである。つまり、大和民族の起源をヘブライやアフリカに求めるものである。また「余輩の斯く信ずるに到りし所以の者は、蓋し両氏の説を探り、後我が風俗習慣及器具等、彼此対照して得たる結果なれば」とあるが、「彼此対照して得たる結果」は論じられていない。ここに出てくるのは「ワニ」だけで、それがなぜ問題となるのかは Schaub や Edkins を読んでも出てこない。

[9] 正直言って、漢文を打ち込むことは大変な作業なので、それも考慮して省いている。

渡部(1893)が引用したものは二人の宣教師の手による。そこで、この二人の宣教師についてみておこう。

Martin Schaub(1850-1900)[10]はバーゼル教会(スイス)所属の宣教師として、中国で布教活動をおこない、他の宣教師とともに新約聖書を中国語に訳している。Schaub は中国語でキリスト教に関連する本を多く書いている。つまり、その中の一冊を渡部が読んで、上の論文を発表したものと思われる。MacGillivray (1907) に、Schaub の著作が掲載されているので、以下に引用しておこう。中国語のタイトルと英語のタイトルを載せておく。

15. 儒教演義 Confucianism, Critique of.
39. 聖経入門 Introduction to the Bible
49. 旧新約聖史記 Old Testment Manual.
83. 旧新約聖史記 Sacred History, Old and New Testments
180. 哥羅西注釈 On Colossians
394. 治会亀鑑 Pastral Theology
399. 仁義要詮 Ethics, Christian. 3 vols.
491. 教会史記 Church History (2 vols)
713. 幼学衍義 Instruction in the Christian Religion (for school)
742. 生道闡詳 Systematic Theology (1884)
743. 教会異同 Symbolics. (Creeds and Confessions of the Churches)
794. 治会亀鑑 Pastral Theology (1885)
888. 仁義要詮 Christian Ethics (theological classes)

渡部(1893:102)が「古国憑経　此書曰く二約聖書釈義の中に輯せらる」と述べていることから『旧新約聖史記』を読んだものと思われる。残念ながら、その原本はみつけることができていない。

一方の Edkins は非常に有名な宣教師である。ウィキペディアを引用しておく。

ジョゼフ・エドキンズ（Joseph Edkins, 1823 年 12 月 19 日－1905 年）は、イギリスの宣教師、中国学者。ロンドン伝道協会の宣教師として清朝時代の中国に派遣された。エドキンズは西洋の学問に関する書物を中国語に翻訳し、また中国の宗教・文化・言語に関する多数の書物を著した。(中略)

言語に関するエドキンズの考えはキリスト教的であり、世界の言語はもとひとつであり、アルメニア・メソポタミアに発祥すると考え、中国語とその他の言語を比較した。

China's Place in Philology. London: Trübner. (1871)

最初の宗教は一神教であり、中国・モンゴル・日本などにも古代に一神教がペルシャから伝わっていたと主張した。

The Early Spread of Religious Ideas especially in the Far East. The Religious Tract Society. (1893)（以上、ウィキペディアより）

[10] Reusch (1900-01) と Hager(1900) を参照した。

上であげた Edkins(1871)の副題は An attempt to show that the languages of Europe and Asia have a common origin というものである。エドキンスは多くの仕事をし、今となってはトンデモ本にあたるような言語起源一元説や宗教一神教伝播説なども書いていた。それを渡部薫太郎は鵜呑みにして「大和民族之故国私考」を書いたにちがいない。

ただ、渡部が引用しているのは漢文、つまり中国語である。その出典をいろいろと探していたら、The Chinese Recorder Vol.13 (1882)の広告に出会った。その広告には Aids to the Understanding of the Bible in the Chinese written language、つまり「中国語文語で書かれた聖書理解手引き」というものが掲載されている。そのなかに Edkins の著書として以下がある。

Notices of places in the Old Testment also found mentioned in the Book of the Han Dynasty B.C. 206 to A.D. 220. by Rev. Dr. Edkins.

こちらには残念ながら中国語のタイトルがない。この英語のタイトルをみるかぎりにおいては、渡部 1893:104)が「聖教所載諸国見千漢書考、條支国　此書は上海刊行にして漢文を以て記せり」と述べるのと符合している。こちらも中国語原本は見つかっていない。

この後にみていくことになるが、渡部は神学校をでて宣教師になろうとしていた。当然、神学校で学んだ西洋の宣教師の説は疑うことなく受け入れた。しかも、驚くべきことは渡部が漢文を通してこれらを学習したことである。渡部薫太郎が卒業した神学校には、こうした文献が置かれていて、それを読んだ渡部が「大和民族之故国私考」を書いた。それがこの論文執筆の背景ではないだろうか。

それがなぜ『史海』に掲載されることになったのであろうか。

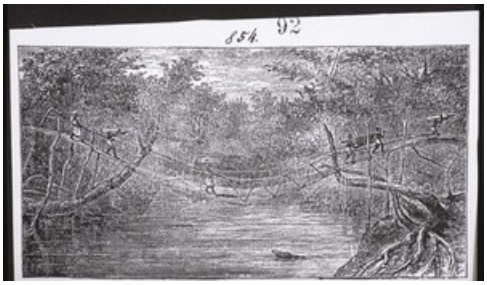
当時、『史海』の主幹だった田口卯吉は、1895 年「人種論」を発表して、日本人と中国人の違いを強調する。それをもとに、1901 年には「日本語＝アリアン語族説」を発表し、新村出や藤岡勝二たち言語学者と論争を繰り広げる[11]。そんな田口自身、渡部の「大和民族之故国私考」が掲載される前号の『史海』23 号に「日本の神字はヒブルウ文字に酷似する」を執筆している。ご存じのように、「ヒブルウ」とは「ヘブライ」のことである。田口自身が日本とヘブライを結びつけていたのだから、渡部の説に飛びついても不思議ではない。ただし、渡部の説はこれだけで続編はでていない。また、田口の論文に渡部(1893)が引用されることもなかった。

一方、渡部がどのようにして田口や『史海』を知ったのか。今のところはっきりとした証拠はないが、渡部が『史海』の読者であったことは容易に想像できる。『史海』は専門の学術雑誌というよりは歴史上の英雄たちに光をあてた歴史読み物的要素もあったので、読者層は広かったと思われる。

以上、あくまでも推測の域を出ないが、渡部の論文が掲載されるまでの経緯を述べた。

なお、渡部(1893:104)「The bridge over the wami」の図はインターネットですぐにみつかった。以下に貼り付けておく。

[11] この辺の経緯については長田(2017:13-19)で詳しく論じた。



４.「間島朝鮮人の宗教及教育」(1922)

1904 年 2 月、日露戦争が始まり、渡部薫太郎は陸軍通訳として、戦争に参加している。また、1908 年には「間島に入り、写真業を開き」と略年譜にある。

まず、渡部が住んでいた間島について述べておこう。

間島とはウィキペディアに以下のように書かれている。

豆満江以北の満州にある朝鮮民族居住地を指す。主に現在の中華人民共和国吉林省東部の延辺朝鮮族自治州一帯で、中心都市は延吉。豆満江を挟んで、北朝鮮と向かい合う。墾島ともいった。(ウィキペディアからの引用)

日露戦争の後に結ばれた「満州及び間島に関する日清協約」(1909 年 9 月締結) により、以下のように定められた。

図們江 (豆満江) を朝鮮と清朝の国境とする。(第 1 条)

清国は間島の龍井村など 4 地域を外国人の居留・経済活動のために開放し、日本が領事館または分館を設置できる。(第 2 条)

朝鮮人が豆満江以北の開墾地に居住することができる。(第 3 条)

間島の朝鮮人は清国の法律に従う。ただし、訴訟事件では日本側の領事館員の立会や覆審請求権が認められる。(第 4 条)

清国は間島の朝鮮人の土地・家屋の保護の義務を負う。また、往来の自由を認める。(第 5 条)

吉長鉄道を延長して朝鮮鉄道と接続することを認める (第 6 条)

(ウィキペディアから引用)

この「日清協約」によって、1909 年に、間島に日本領事館ができたのだが、その前年に渡部は間島に入っている。渡部が間島に入ったころはまだ人口も少なかったようだが、「居住者の数は 1900 年代の 7〜9 万人から、1930 年代の四十数万人へ増加」(コトバンク) と膨れていった。また、1911 年の日韓併合や 1919 年の三・一運動など、歴史的事件が続いた時代であった。

じつは、渡部自身がこの辺の経緯を語った文章がある。

それが「間島朝鮮人の宗教及教育」と題し、在外朝鮮人事情研究会が編集した『北満及露領朝鮮人事情』(1922 年刊行) に掲載されている。そこには、渡部の間島に来るまでの人生についても述べらている。石濱の追悼文にもこの文章のことは言及されていない。そこで、その全文を (付録) として

小論の最後に引用しておく。以下では、こちらで分かる範囲で説明を加えたい。

まず最初に、間島の朝鮮人について、この時点(1922 年) で約三十万人と指摘している。ウィキペディアによると、「1907 年に約 10 万人であった間島の人口は、1931 年（昭和 6 年）には約 52 万人となり、同地域の朝鮮人の人口も約 7 万人から約 40 万人へと増加した」とある。渡部は陸軍にいて日露戦争に参加したことから、かなり正確な人口動態の把握ができていたことになる。

渡部(1922a:35)の第二段落から、渡部の人生遍歴が赤裸々に語られている。順を追って、略年譜と照らしておこう。

まず「予は二十歳前後に際し英国聖公会宣教師より洗礼を領け信徒の列に加はり神学生となつた」(35 頁）とあるが、これが略年譜の「大阪川口英語学舎に於て英語を学ぶ」(20 才～22 才）と「大阪川口三一神学校に於て神学及び英語を学ぶ」(23 才～27 才）と対応する。最初に英語を学んだ段階で英国聖公会宣教師より洗礼を受けていたことになる。また神学校卒業に際し、「予は朝鮮には天主教あれど新教は其派別を問はず未だ伝道に着手せぬ為め朝鮮伝道の希望を懐いた」(35 頁）という。これが約四十年前とあるが、出版年からだとすると 1882 年頃である。略年譜では 1887 年に神学校を卒業しているので、川口英語学舎にいたころから「朝鮮伝道の希望」を持っていたのであろう。

ここに出てくる「メソヂスト宣教師アンダーウツト氏」(35 頁）について、ウィキペディアでみておこう。

ホレイス・グラント・アンダーウッド（Horace Grant Underwood、1859 年 7 月 19 日 － 1916 年 10 月 12 日）は、近代朝鮮で活動したプロテスタント（長老派）の宣教師・言語学者・教育者。元 杜尤（ウォン・ドゥウ）の朝鮮名を名乗った。(中略)

朝鮮での宣教を志願し、1884 年 7 月に北長老教会海外宣教師に任命され、朝鮮への派遣が決定される。1884 年 12 月 16 日、サンフランシスコを出港。日本の横浜に到着するが、甲申政変にともなう朝鮮の政情不安や旅費の問題からそのまま横浜に滞在することとなり、当時日本で聖書の翻訳活動などを行っていた朝鮮人キリスト教徒・李樹廷から朝鮮語を学んだ。1885 年 4 月 5 日、メソジスト教会の H・G・アペンゼラー夫妻とともに朝鮮・仁川に上陸する。(ウィキペディアによる)

このウィキペディアから、アンダーウッドは同じプロテスタントではあるが、メソジストではなく、長老派の宣教師であったこと、朝鮮に入ったのが 1885 年であること、つまり「宣教師アンダーウツト氏の渡来に先んずること四年であつた」(35 頁）が 1881 年を指し、その当時、渡部が「川口英語学舎で英語」を学んでいたことなどがわかる。やはり、英語を学んでいた時から「朝鮮伝道の希望」をもっていたことはまちがいないだろう。

次に「釜山領事前田献吉氏に書を寄せ英仏日文を論せず、朝鮮語を学ぶに必要なる書籍の周旋を求めて」(35 頁）とある。前田献吉(1835-1894)は、ウィキペディアには「幕末の薩摩藩士、明治期の官僚・外交官・政治家。元老院議官、貴族院勅選議員、錦鶏間祗候」とあって、典型的な明治のエリートである。釜山の総領事だった期間は 1882-1887 年でなので、渡部が神学校で学んでいた時期に相当する。そして、前田から「早速「交隣須知」と云ふ書籍を手に入れた」(35 頁）とある。

「交隣須知」とはどういった本なのか。

朝鮮語研究の第一人者である伊藤英人(2000)[12]によると、「享保 12(1727)年、雨森芳洲の建議により対馬府中(現在の厳原)に朝鮮通詞養成所が開設された。このための中心的教材の一つとして江戸期を通して使用されてきたのが、「交隣須知」である。自ら釜山で朝鮮語を研鑽し、他に多くの朝鮮語学関連の著述をもつ雨森芳洲がこの本の編纂に大きく関与したと考えられている」という。

また、陳(2018:72)によると、「明治 14 年刊『交隣須知』は浦瀬裕と宝迫繁勝の協力で刊行されたが、明治 16 年には浦瀬裕と宝迫繁勝がそれぞれ『再刊交隣須知』と『交隣須知』を刊行し、2 年間で 3 本の『交隣須知』が刊行された」[13]という。この渡部が前田からもらった本はこのうちどれにあたるのかは定かではないが、明治十四(1881)年版外務省蔵版「交隣須知」について、伊藤英人(2000)の説明を引用しておこう。

廃藩置県に伴い対朝鮮外交が外務省の直接管轄下に置かれるに至り、明治 5(1872)年に対馬厳原に外務省厳原韓語学所を、翌明治 6(1873)年にはこれを釜山草梁に移して外務省草梁館語学所を開設した。この外務省韓語学所の教官・生徒及び朝鮮語教育の内容は江戸期以来の対馬藩朝鮮通 詞養成所のそれを引き継ぐものであった。この最初級の教科書として使用されたのも「交隣須知」(写 本)であった。明治 13(1880)年、東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されるに伴い外務省韓語学所はこれに移管される形で廃止された。東京外国語学校朝鮮語学科はその教授陣、生徒の一部、教科書、教育法において対馬藩以来のそれを継承してスタートしたことになる。

外務省蔵版「交隣須知」はこうした中で出版されたものである。明治 13(1880)年 5 月の日付をもつ浦瀬裕による識語によれば、永年写本として使用されてきた「交隣須知」は釜山近辺の方言が混じり訛言が多く「今日の用に適するに足ら」ないため、朝鮮国江原道の士金守喜およびソウルの学士に疑問点を質し、「昔日の面目にあらず」と言えるほどにこれを訂正した。外務省が日韓活字および印刷機を付与し、明治 14(1881)年 1 月釜山においてこれを印行した。(伊藤 2000)

渡部は明治前期に外務省が刊行した、いずれかの版の「交隣須知」を前田から送ってもらい、それで朝鮮語を自習したことはまちがいなかろう。

そこまでして、朝鮮伝道を夢見ていた渡部だったが、「突然として予が前途に蹉跌を生じ当初の目的を到達し得ざる悲しい運命に陥つた」(35-36 頁)という。それが何を指すのかはあきらかではない[14]。

---

12 伊藤教授によると、紙媒体で出版されたものはなく、以下のインターネット版しかない。
https://www.tufs.ac.jp/library/top/about/exhibition/200006-2/

13「交隣須知」の諸本については斉藤明美(2002)『「交隣須知」の日本語』(至文堂)がある。また、上記の陳(2019)論文を含め「交隣須知」に関しては伊藤教授よりご教示賜った。この場を借りて謝辞を表したい。

14 大阪外国語大学同窓会５０周年記念誌『きんきら 50 年』に掲載された津田喜代獅の話によると、「もっとも想い出す人は、満洲語の渡部菫太郎先生であろう。四十才過ぎて肺病の宣告をうけ、半ばやけ気味で渡鮮。先づ朝鮮語に興味を覚え、中国語、満洲語を知り、満洲語文典を読む為、独逸語、露語を学び、西蔵語、契丹語、西夏語に興味を持ち、四カ国対照文典を教室で披歴し、盛んに満洲語研究の後継者を求めていられたが、早く卒業して満蒙へと心はやる私達には、繰り言のように聞こえた。後継者なき儘、八十余才の高齢で他界せられた」(207 頁)とある。名前が菫太郎とまちがい、亡くなった年齢(本当は 76 才)など、いくつかのまちがいがみられるので、どこまで信用していいのかわからないが、朝鮮上陸の時期が 42 歳で合致することから「突然として予が前途に蹉跌を生じ」た原因は、津田の指摘する肺病の可能性もある。

その後、「明治三十五(1902)年中、公用にて馬山浦に上陸したるは、予が朝鮮に足跡を印する最初」（36 頁）だというが、この年には「通信書記補」であった。初めての朝鮮で、「釜山在留の宣教師ロツス氏と相識り」（36 頁）とある。そのロツスとはどういう人であろうか。

ロツスとはJohn Ross(1842-1915)のことであろう。ウィキペディアによると、「英国スコットランド出身のキリスト教宣教師で、19 世紀後半から 20 世紀にかけて中国東北部を中心に布教して、瀋陽に東関教会を建てた。はじめての朝鮮語の聖書翻訳をした」とある。また、1877 年に Corean Primer、1882 年に Korean Speech, with Grammar and Vocabulary をそれぞれ出版し、朝鮮語研究のパイオニアとして知られている[15]。

渡部の人生遍歴に戻ろう。「二回目の渡鮮は三十七(1904)年四月、三回目は三十八(1905)年五月で会寧の地を踏みたるは同年九月二日即ち日露戦役の終期であつた」（36 頁）とある。これら朝鮮訪問はすべて陸軍通訳として、日露戦争に参加したときのことである。会寧は現在北朝鮮の咸鏡北道北部の会寧郡にある町で、豆満江を隔てて中国東北に接している。

日露戦争が終わった後も、現地にとどまった渡部は「年来朝鮮人間の伝道を希望し居れる事とて更に進んで朝鮮の極北穏城に赴き日鮮官民の援助の下に日語学校を創設し日本語の教授を開始したのは実に明治三十八(1905)年十二月二十一日」（36 頁）だという。穏城はウィキペディアによると、「穏城郡（オンソンぐん）は、朝鮮民主主義人民共和国咸鏡北道に属する郡。北朝鮮統治範囲の最北端にあたり、名目上は大韓民国領土の最北端でもある。穏城郡の西北部にある南陽労働者区と、豆満江対岸の中華人民共和国図們市の間には図們国境大橋が架けられており、中朝物流の動脈の一つとなっている」とあり、図們国境大橋は中朝国境のテレビ中継などでおなじみの橋だ。

その穏城で、渡部は「当時元山大韓教会の教役者は巡回伝道を試みつゝあり、予も時々其教会に出入した」(36 頁）と書いている。その当時の元山大韓教会は「1903 年の夏に始まった元山の復興運動」がおこなわれており、活発なキリスト教信仰覚醒運動のさなかだった[16]。宣教師としてではないが、この穏城では教会に出入りするようになったという。

そして、渡部は「明治四十(1907)年六月穏城を去りて会寧に出て四十一(1908)年二月間島に入り今日に及んで居る」（36 頁）と記している。これと略年譜の「1907 年 8 月～12 月　朝鮮軍司令部より浦塩地方へ特別任務につき派遣」とがどのように関連づけられるのであろうか。

まず、ウィキペディアによると、朝鮮軍とは以下を指す。

朝鮮軍は、大日本帝国陸軍の軍の一つ。朝鮮を管轄した。朝鮮民族によって組織された軍隊ではない。

日露戦争を機に大韓帝国へ駐留した大日本帝国陸軍の韓国駐箚軍を前身とし、明治 43 年（1910 年）の韓国併合に伴い朝鮮駐箚軍に名称変更、大正 7 年（1918 年）に朝鮮軍となった。（ウィキペディアによる）

このウィキペディアにしたがえば、1907 年段階では「朝鮮軍」ではなく「韓国駐箚軍」である。また、浦塩とはウラジオストックのことである。

---

[15] John Ross についてはGrayson (1999)を参照した。

[16] 元山の復興運動については、李徳周・常石希望訳(2008)を参照した。

では、「特別任務」とはいかなる任務なのか。

許金生(2012:62)によると、「日露戦争終結直後の 1905 年、関東州民政長官・石塚栄蔵を委員長とする「満洲産業調査会」が設立され」て、「1906 年、陸軍省は「特別任務者」を派遣して「満蒙」に対する大規模な物資調査、いわゆる「満蒙物資大調査」を実施する方針を」打ち出した。その「調査担当者である「特別任務者」の多くは日露戦争中兵站などで後方物資補給に勤め、豊富な専門知識と現地物資徴収の経験に富んだプロであった」という。この「特別任務者」の一人が渡部薫太郎だったのではないだろうか。

こうして間島に入った渡部は表向きは「写真業」(略年譜による）を営みながらも、「専門的に宗教運動に身を投ぜん希望は日に日に切なるもの」(36 頁）となり、「いよいよ其決心を堅め何事をも打棄て遂に大正二(1913)年一月第一日曜日を以て予が目的に対して前進を開始したのである」(37 頁）という。ただし、教会を開設したのかなど、具体的な布教活動については述べられてはいない。しかし、「素より相談相手とてはなく、又後援者即ち信徒の援助もなく、全く単身独歩なる為め万事に於て、進歩の遅々たるは覚悟の前であるが、若し予に大能の手の加はるに於ては又何の難き事があるべき実に此確信を持して居た」(37 頁）と強い決意だけは伝わってくる。

渡部の文章の中に、「例の万歳運動以来」(36 頁）と出てくるが、これが 1919 年の三一運動を指している。したがって、布教活動を開始したのちの出来事だ。そして、「遂に我が軍隊の出動討伐」(36 頁）とあるのは「間島出兵」をさしている。ウィキペディアによると、「間島出兵は満州の間島（現・中華人民共和国吉林省延辺朝鮮族自治州）で日本軍が朝鮮人や中国人の活動家、匪賊、馬賊に対して実施した鎮圧・掃蕩作戦で」、その経緯は以下のとおりである。

朝鮮各地で独立を訴える三・一運動（独立万歳運動）が起こると、これに呼応して、満州の間島と呼ばれる朝鮮人居留地域において、独立軍と総称される朝鮮独立運動に関わる武装組織の活動が活発化した。これらの武装組織は、居留朝鮮人から金品や食料を調達したり、中国官憲やロシア過激派との協調を通じてその武力を蓄えていた。日本側は武装組織に関わる朝鮮人を「不逞鮮人」と呼び、中国側に討伐を要請したが、ほとんど成果が現れなかった。(中略)

そうした中、1920 年 9 月 12 日、10 月 2 日の二度にわたり琿春が馬賊等に襲撃され、日本領事館が焼失し、女性や子供を含む 13 人が殺害される事件が発生した（琿春事件)。同年 10 月 7 日、この襲撃を「不逞鮮人」によるとした原内閣は、居留民保護を名目に間島出兵を閣議決定し、中国側との折衝を開始した。同年 10 月 16 日には吉林都督と奉天で結ばれた「日支協同討伐に関する協定」により、東支鉄道以南 20 里を除く東寧県、琿春県、延吉県、汪清県、和竜県の 5 県を日本軍が、それ以外の地域を中国軍が担当して、武装組織の掃討に当たることとなった。(ウィキペディア)

この騒乱や襲撃がおこなわれているなか、渡部は「日本人の信者と交際する機会もなく支那人及朝鮮人の信徒を交友として、暫く時期の到来を俟つて居た」(36 頁）というのだから、その信念がいかに確固たるものだったのかをうかがい知ることができる。また、「其不逞徒輩中には純然たる耶蘇教もあれば求道者もあり、又教義に暗らき信徒もあつたには相違ないが、之が為に耶蘇教其者を目して直ちに国賊とか将又邪教と称するに至つては耶蘇教の為めに大に弁護の地位に立つの必要を認め」(36-37 頁）と、三一独立運動の参加者にキリスト教徒が多かったことを認めつつ、キリスト教の弁護

をするという苦しい立場に立たされていたことがわかる。

以上、「第一」に書かれていることの説明を終える。

次の「第二」は間島における宗教事情を述べたものである。

宗教として、(1)侍天教、(2)天道教、(3)青林教、(4)済愚教、(5)檀君教、(6)大成儒教、(7)耶蘇教(キリスト教）と述べた後、仏教の状況についても言及している。渡部自身はキリスト教徒であり布教をおこなう立場でありながら、キリスト教が一番だという態度ではなく、それぞれの宗教の現状をかなり客観的に分析している。侍天教のところで、「第一に人徳即ち人を威化する徳望の所有者が必要である」(38 頁）と宗教者の立場を強調しているが、その宗教が布教できるかどうかは布教する人間の人徳しだいであるという主張は一貫している。(1)から(4)を東学教的とし、「東学教的系の現勢で之を公平に批判すれば教義外の教義より政治的又は政社的色彩を全然排除して尚ほ一層宗教的信仰を復興するのみか、小異を捨てゝ大同に就き、一の東学教として世に立たざる限りは、充分に其宗教的使命を到達するは困難であらう」(40 頁）と指摘しているのはなかなか含蓄があって興味深い。

自身の信仰であるキリスト教に対しても、なかなか手厳しい。特に、新教(プロテスタント)への批判はまるでキリスト教批判者の言葉のようである。というのも、「世俗の所謂縄張り即ち伝道区域」(42 頁）があり、「間島は加奈陀派の手に帰したる為め他派は之が伝道に指を深することが出来ぬ」(42 頁）という状況で、そのカナダ派の伝道が問題だと渡部は指摘する。「間島の新教信徒は数千名」にも上り、「毎日曜日には満堂立錐の余地」がないが、「洗礼を受けたるものは大略十分の一二に過ぎ」ず、宣教師は「御国気質を抜きにして天上の天国を地上に現出すべく耶蘇の心を以て我が心として人の子を愛すべきこと」が当然なのにもかかわらず、「間島にては往々宣教師非難の声を耳に」し、「耶蘇教宣教師の政治的運動特に布教団の内政に容啄せず否却つて其教府に奨順すべく時の如何に論なく等しく人を教化すべく慫慂すれど毎々之を裏切るの行為多」(以上、すべて 43 頁）かったという。それに対し、渡部は「耶蘇の御心であると信」じて「耶蘇即ち救主を宣伝すればソレで足れりとする」(44 頁）と指摘する。

仏教についても述べていて、「大谷派本願寺開教師上野与仁師」(46 頁）の間島赴任には期待を寄せていて、「異教徒の予も一方ならず敬意を表せざるを得ない」(47 頁）と表明している。宗派に関係なく、人を見ようとする渡部の姿がそこにある。「宗教の力を以て内鮮融和を図るは宗教家の本分なれば其宗派の論なく互に其目的に向つて進行すべきである」(47 頁）というのが渡部の偽らざる気持ちなのであろう。

さいごに、「結局間島の宗教は東学教対耶蘇教、東学教対仏教の競争となり、他面に耶蘇教対仏教の競争となるべく要するに間島の野は三宗教が各一方に割拠して教勢の覇を争ひ三角競走となるは勢ひ免かれ難き事であらうが、最後の勝利は果して何教派の手に帰すべきか真に刮目すべき問題である」(47 頁）と述べ、あくまでも客観的に見ようとする立場を崩してはいない。

以上が、渡部による間島における宗教の現状である。

この「第二」には、渡部が最初に間島に入ったときの様子が記述されている。「明治四十(1907)年夏、間島の龍井に足跡を印した時は朝鮮人家屋は僅々二三十戸位に過ぎ」ず、「当時の龍井は実に見る影もなき寒村にして、旅人宿もなければ飲食店もなく、勿論郵便電信の機関もあらず」して、「会寧と龍井間を往来するものは幾つんど皆無と云ふも差支なき」（以上、41 頁）状況だったという。この 1907 年は略年譜によると「朝鮮軍司令部より浦塩地方へ特別任務につき派遣」の時期である。そして 1908

年2月に、渡部は「見る影もなき寒村」である間島に、朝鮮人へのキリスト教布教を目的として移住していったのである。

「第三」には間島における教育の現状が述べられているが、渡部の生涯に関する記述はないので、ここでは触れない。また、「第四」はこれまでのまとめであって、新しい情報もないのでこちらについても取り上げない。渡部の教育への情熱を知りたい方々は付録にあげた全文を読んでいただきたい。

渡部薫太郎は朝鮮伝道の意志をもって神学校に学んだが、「前途に蹉跌を生じ」たためにその意志を貫くことができなかった。しかし、日露戦争に従軍し、朝鮮の地を踏み、再びその意志を貫こうと間島に入り、朝鮮人や中国人への布教伝道をおこなった。それが渡部(1922a)からあきらかになった。

冒頭での『亜細亜研究』をみたように、渡部は満洲語や女真語の研究者として知られる。しかし、渡部の原点には朝鮮伝道の希望を懐いていた神学校での体験があった。小論では渡部の朝鮮伝道への思いや間島での様子をみてきたが、石濱の追悼文には、それらのことは触れられていない。

渡部の間島時代に関連して、金珽実(2017)に触れておきたい。

金(2017)は『満洲・間島における日本人』と題し、「第四章　渡部薫太郎」で、渡部を取り扱っている。石濱の渡部追悼文と上原(1965・1966）と渡部の満洲語関連書籍を引用して、渡部の間島時代を論じている。いかんせん、渡部の間島時代を知るために、最も重要な文献である渡部(1922a)には一切言及がない。したがって、渡部が敬虔なキリスト教徒であり、朝鮮人の布教伝道を目指していたことは全く考慮されていない。すでに略歴でみたように、「1909年北鮮日報間島通信部嘱託、1919年龍井村居留民会書記、1920年大阪朝日新聞間島通信部嘱託、同年京城日報間島通信部嘱託、1921年書記長依願退職、同年 12 月在間島朝鮮人指導のため、朝鮮総督府より警察業務嘱託」を並べると、渡部が諜報活動をおこなういかがわしい人のように思われる[17]が、そのような認識が金(2017)にも読み取れる。

その例として「1922 年 9 月永新中学校の日本語講師嘱託」を取り上げる。この永新中学校は渡部(1922a)にも登場する、キリスト教会カナダ長老会が経営していた。普通に考えるに、カナダ長老会の関係から日本語講師を引き受けたと考えられる。しかし、この永新中学校を含む永新学校は、1925年、日高丙子郎の光明会に買い取られる。その日高について、「日高丙子郎と光明会は日本政府と特別な関係を持ち、日本による侵略の一翼を担いつつ朝鮮人同化政策を行った、と批判的に評価される」(倉田 2020:29)という[18]。

こうした背景から、金は渡部の永新中学校就職について、こう指摘する。

但し、ここで新聞通信部、居留民会書記、警察事務などで活躍した渡部薫太郎が反日学校として有名な永新学校で講師を務めることは外の意味があるのではないかと思われる。後に日高丙子郎が経営する光明会によって買収されるが、それは、日高がただの慈悲から永新学校を買収したのではなく、

---

17 じじつ、中見立夫(2016)は「渡部薫太郎は、関東州で写真屋をやっていたという、はっきり言えば胡散臭い人ですね」(44 頁）とか、「渡部薫太郎、今の北朝鮮と東北の境界の町で写真屋をやっていた。スパイだったのではないかとも思います」(47 頁）と発言している。渡部(1922a)を読まずして、こう決めつけるのはいかがなものか。

18 一方で、在間島領事館警察部長などを歴任した相場清によると、日高丙士郎について「これは立派な人でした」と発言している（宮田節子監修 2001:246)。なお、相場清については植田晃次(2009)を参照した。そこに相場清年譜が掲載されている。

排日独立運動の拠点となっている永新学校を買収することによって、後患を除去するためであった。つまり、渡部薫太郎が永新学校の講師になる時から永新学校を買収しようとする準備があったと推測できよう。(金 2017：70)

金は渡部薫太郎が日高丙子郎と結託していたかのように推測するが、それならばその証拠を提示すべきである。実際に日高が永新学校を買収するのは 1925 年のことであり、永新学校が「1924 年には飢饉の余波を受けて経営難に陥った」(倉田 2020:29)。その結果、翌年に光明会が永新学校を買収するというのが実際の経緯のようだ。しかも、渡部が永新中学校に勤務していたのは 1922 年から 1924 年のことである。そうした事実を無視して、渡部の経歴からだけ推測して、渡部と日高を結びつけるのはいかがなものか。

もちろん渡部がスパイではないと断定する根拠はどこにもないし、文献的には何も裏付けられてはいない。しかし、渡部について何かをいうのであれば、渡部(1922a)を読んでから言うべきである。赤裸々なキリスト教への思いを告白し、宗教状況をかなり客観的に分析している渡部を「日帝の手先」と断定していいのかどうか。カナダ長老派の経営していた永新学校に、同じ信仰を持った渡部が勤務することはなんのふしぎもないはずである。また、1924 年の経営難で永新中学校を辞めたと、なぜ素直に読めないのだろうか。

もう一点、間島時代の渡部が登場する記事を紹介しておく。

1902 年に発刊された『国際法雑誌』という雑誌がある。第 11 巻第 1 号から『国際法外交雑誌』と改題され、現在まで続く雑誌である。その第 9 巻 3 号(1910 年 11 月 25 日発行）に「間島巡警暴行の顛末」という記事に渡部薫太郎が登場する。それを引用する[19]。

間島巡警専恣事件の顛末を聞くに該事件の発生地たる間島局子街は遊郭料理店のある処にして七月二十五日午後十時頃日本人二名が同処大和庵に於て酌婦を招き陽気に騒ぎ居たるに十一時頃突然清国の騎馬巡警八名来たり。深夜喧噪するは不都合なりと言ふより日本人の一人は清国の規則は十一時なるやも知らされど、此家は日本人の住家なれは日本人の規則に依り十二時迄は差支なしと言ひしか基にて忽ち衝突となれり。此時付近に居合せた渡部薫太郎なる者此騒ぎを只事ならじと大和庵に駆付けたるに三名の清国巡警は無法にも渡部に斬り付けて負傷せしめたれば、騒動は益々大きくなり、清国巡警等は一等巡官耿某の指揮の下に凡そ四五十名集まりて大和庵に闖入し家内を家探しつつ居たるが、軈て轟然たる二発の銃声と共に何者かを捕縛し暴戻なる清巡警は追追引上げ行きたり。後大和庵の家内を検するに家財家屋は勿論、器具は大半破毀されしのみならず、衣類及び清貨二百吊程を略奪され且天井には二三か所の弾痕残り居たり。(『国際法雑誌』9(3):233)

この事件は 1910 年 7 月におきたものと思われる。1908 年 2 月に間島に入った渡部は、当時日本人が少なかったので、日本人が起こした問題を解決すべく駆け付けたのにもかかわらず、負傷してしまったと推察できる。この記事からも間島時代の渡部がいかに困難な状況にあったのか、その一端を知ることができる。

---

19 この記事も読む人によっては「スパイ」や「胡散臭い人」と読めるかもしれないが、渡部薫太郎に関する記事はなるべく公刊するという立場から、ここに引用した。

従来、渡部薫太郎の間島時代については、石濱(1936)や上原(1965)以外に何も情報がなかった。しかし、ここに渡部(1922a)と『国際法雑誌』の記事によって、これまでわかっていなかった間島時代の渡部の姿を映し出すことができたのではないだろうか。巻末には、渡部(1922a)の全文を付録として掲げたので、渡部が胡散臭い人間だったのかどうか、皆さんの眼で判断していただきたい。

５．「満語学叢書刊行之辞」(1918)

ここまでみてきたのは渡部(1922a)「間島朝鮮人の宗教及教育」である。

そこには満洲語のことは一切出ていない。しかし、渡部(1922a)以前に、満洲語に関する書籍を出版している。それが渡部(1918)「満語文典」である。その本の冒頭に「満語学叢書刊行之辞」がある。そこには、渡部がなぜ満洲語を学ぶようになったのかが書かれている。それを以下に引用する。

満語学叢書刊行之辞[20]

時ノ古今ヲ問ハズ、満洲ノ文化之ヲ支那ノ文化ニ比スレバ其度大ニ低ク、支那人ノ野人ト称シ胡族ト呼ブ。蓋シ故ナキニアラズ。愛親覚羅ノ満洲ニ興リ、支那ヲ征服シ関ノ内外ニ君臨シテ以来、或ハ陰ニ或ハ陽ニ支那ノ文化ヲ以テ満人ヲ啓発シ、歴代ノ帝王ハ祖先ノ志ヲ継ギ、孔孟ノ教ニ則リテ民ヲ治メ、其ノ徳教ヲ進メテ大ニ効果ヲ収メタリト雖トモ、コレガ為メ満人ハ漸々支那化シ、終ニハ現今各地ニ散在スル満人ニシテ、己ガ固有ノ言語ヲ解スル者少キニ到リ、又コレヲロニスルダニ耻ヅル傾向アリテ、専ラ支那語ヲ語ルニ到レリ。故ニ支那語ヲ以テ満人ト談話応対セバ自他共ニ些少ノ不便ヲ感ゼズ、特ニ満人青年ノ如キハ自由ニ支那語ヲ操ツリ、且ツ日常ノ動作殆ンド支那人ト異ルコトナク、又漢文漢字ノ教育彼等ノ裡ニ普及シ、著々効ヲ奏スルヲ見ル時ハ、半世紀ヲ多ク出デズシテ満語ハ自ラ廃語ニ帰シ、僅ニ其ノ形骸ヲ書冊ノ上ニ留メ、希伯来語及ビ其他ノ言語ト運命ヲ同フスル不幸ニ陥ラントスルハ識者ノ認ムル所ナリ。

今ヨリ約三百年前、満人ノ蒙古文字ヲ採用シ多少改変ヲ加ヘ、コレヲ以テ自己ノ言語ヲ写セルハ満語ニ於ケル一段ノ進歩ニシテ、其ノ便ナル点遙カニ漢字ノ上ニアリ。又契丹女真文字ノ及ブ所ニアラズ。然レドモ其形複雑ニシテ相似タル者多ク、一気之ヲ読下スル容易ノ業ニアラズ。辞典ノ力ヲ籍リテ之ヲ解カンカ、字典其発音ヲ示サズ。之ヲ知ルニ苦シムハ、正ニ同語ニ於ケル一大欠点トス。而シテ露仏独ノ学者、若クハ宣教師等、万難ヲ排シ満語ヲ学ビ、或ハ辞書或ハ文法書ヲ著述編纂シテ、世界ノ文学ニ貢献シ、近クハ英国聖書会社ハ莫大ノ資金ト労力光陰ヲ費シテ、満文四福音書ヲ翻訳刊行シ希教ノ用ニ供セリ。而シテ康熙乾隆ノ頃、朝鮮ハ隣邦修交上特種ノ関係少カラザルヨリ、勢ヒ必要ニ逼マリテ満朝対訳ノ書ヲ出セリ。翻テ我ガ内ヲ顧ミル時ハ、同胞ニシテ満語ヲ学ビ外人ノ出版ニ先ジ辞典文典ヲ編セシハ蘭語通事ノ高橋氏アリ。其志ノ遠大ト其努力ノ壮大ナル。敢テ他邦ノ学者ニ一歩ダモ譲ラズト雖ドモ、氏ノ心血ヲ注ギテ成セル原稿ノ一朝烏有ニ帰シ、僅カニ満文随筆ノ一巻ヲ残シタルハ、学界ノ為メ惜ミテモ尚ホ余リアリト云フ可シ。氏世ヲ逝リテ約百年ヲ経、今日ニ到ルモ邦人ノ著アルヲ聞カズ。コレ全ク余ガ寡聞ノ罪ナル可シト雖ドモ、我ガ学士先輩ハ満語其物ヲ以テ一顧ノ価値ナキ者ト軽視スルニハ非ザルカ。又満人既ニ支那ノ文貨ニ征服セラレ、固有ノ言語風俗ヲ棄テ、

[20] 管見の及ぶところでは、渡部(1918)の「満語学叢書刊行之辞」はすでに上原(1965:2-3) が全文を、金(2017:71-72)は冒頭や途中の約１頁分が省かれて、引用されている。なぜ一部省かれたのか、その意図するところはわからない。

満漢ノ差ナキ到リタルヲ以テ、満語ハ全ク用ナキ者ト断定シ、コレヲ文学語学ノ両界ヨリ駆逐セルニハアラザルカ。将タ満語ノ書外人既ニ大成セリ。何ゾ邦人ノ著ヲ待ンヤト云フニハアラザルカ。何レヲ是トス可キカ余ノ解スルニ著ム所ナリ。

優勝劣敗ハ駸々乎トシテ生物界ニ行ハレ延ヒテ、人類言語ノ上ニ行ハル故ニ、不完全ナル言語又ハ劣等人種ノ言語ハ漸ヲ追フテ向上シ、或ハ人種ノ滅亡ノ結果死語廃語ニ属セントスルハ止ムヲ得ザル者ナリトスルモ、邦語ト語族ヲ同フスル隣邦満語ノ将ニ廃滅ニ帰セントスルハ、大ニ惜ム可キニアラズヤ。日露戦役ノ血痕未ダ乾カズ。腥風北鮮ノ山野ヲ吹ク時、射利ノ目的ヲ以テ女真ノ故地、即清ノ発祥地ト称スル問島ニ来リ。偶支那文学ニ精通セル満人成蔚氏ト相知リ、日満語学ノ交換教授ヲナセリ。コレ余ガ満語ヲ研究スル第一歩トス。是ニ於テ余ハ満語其物ノ性質及価値ヲ認ムルト同時ニ、射利ノ念ヲ棄テ専ラ満語ヲ修メテ文学界ニ益セント決心セリ。越テ二年余ガ志ノ将ニ緒ニ就カントスルヤ、妻ハ祖先ト共ニ故山ニ永眠シ、次女ハ慈母ヲ失ヒ又父ノ異郷ニ客タルヲ以テ、日夜独リ悲嘆ニ沈ム。幸ニ義兄ト長女ノ為メ教養セラルノコトトナリ、再ビ東都ニ上リ父ノ成効シテ帰朝スルヲ待ツ。余ノ為メニハ悲嘆コレヨリ大ナルハナシト雖ドモ、中途ニシテ当初ノ志ヲ変ズルコトナク、夜間人定マルノ後、往事ヲ追懐セバ、感慨胸ニ逼マリテ断腸ノ思ヲナセシコト幾回ゾヤ。然レドモ徒ニ悲嘆ニ沈ミコレヲ廃センヨリハ、当初ノ志ヲ成シ親族ノ恩ニ報フル即社界ニ益スル者ナルヲ悟リ、我悲嘆一掃シ志ナラズンバ止マザル可シト誓ヘリ。然レドモ余ハ無資無産ノ徒、終日コレガ研究ニ没頭スルヲ許サズ、故ニ未熟ノ技ヲ売リ辛フジテ糊口ノ資ヲ得、窮乏ニ臨ンデハ仁人ノ恩恵ニ浴シ、書籍ノ必要ニ際シハ篤志ノ贈与ヲ蒙リ、其ノ研究ヲ継続シテ今日ニ及ビ纔カニ之ヲ筆シシ[21]、之ヲロニスルモ未ダ[22]其ノ堂ニ昇ルヲ得ズ。仮ヒ満語ニ熟シタレバトテ之ニ由リテ有用ナル新智識ヲ得ルノ望ハ絶テナク、徒ニ時間ト労力ヲ費シ、所謂労シテ功ナキ業ニ従フヲ以テ、人或ハ余ヲ評シテ愚者ト云ハンカ。コレ余ノ甘ンジテ受ケントスル所ナリ。蓋シ人ト余トハ唯見地ヲ異ニスルノミ。例ヘバ地中ヨリ出タル一坐ノ土偶一片ノ器物モ、或ハ人類或ハ考古学者ノ為ニハ貴重ノ材料タル如ク、野人胡族ノ言語モ言語学者又歴史家タル人ニ対シテハ大ニ研究スル可キ価値ノアルヲ認メ、聊タリト雖ドモ我ガ学界ニ貢献スル所アランコトヲ期シ、不学短才其任ニアラザルヲ知ラザルニアラザルモ、文典幷ニ辞典ヲ纂沢シ余ガ敬愛スル領事鈴木要太郎君ノ手ヲ経テ、白鳥文学博士ノ許ニ送リ批評ヲ請ヘリ。同博（士）ヨリ浅薄ナル草稿ニ対シ過分ノ謝辞ヲ辱フシ大ニ面目シ、余ガ志ノ徒労ニ属セザルヲ知ルト同時ニ、余ガ責任ノ軽カラザルヲ自覚セリ。然レドモ余ハ南満ノ一角辺僻ナル問島ニアリ、無識ナル一个ノ田舎巡リノ写真師タル余ノ独力ヲ以テコレヲ大成スル容易ノ業ニアラズ。故ニ余ガ満語研究ノ径路ト満語学叢書発行ノ主旨ヲ述ベ、コレニ対シテ学士先輩ノ指導ヲ蒙ランコトヲ切ニ希フ請フ。余ノ微衷ノアル所ヲ察シ、余ガ戴ヲ啓キ余ガ為メニ指導セラレンコトヲ今希望ヲ述ベテ、発行ノ辞ニ代フト云爾。

大正七年五月十九日　　渡部薫太郎

渡部の「満語学叢書刊行之辞」(以下、「辞」と略す）を見る前に、わが師・池上二良による「満洲語」[23]についての記述をみておこう。

---

[21] この「筆シシ」の部分は上原(1965:4)によると、「印刷がうすく判読しがたい」とあるが、インターネット上にある版は印刷がはっきりと見える。

[22] ここの「モ未ダ」も「印刷がうすく判読しがたい」(上原 1965:4)とあって抜けている。

[23] 以下のサイトから引用した。
https://kotobank.jp/word/%E6%BA%80%E5%B7%9E%E8%AA%9E-137954

清国を建てた満洲族（満州族）の言語。漢民族の漢語（中国語）とは別の言語である。しかし満洲族は、文化的には漢民族に同化し、満州語を使うことをやめ、中国語を使うようになり、今日満州語は中国東北部でも北のごく小部分でしか話されなくなった。錫伯族（人口 1990 年 17 万 2900 人）もかつて東北部で満州語を使っていたが、その後中国語を話すようになった。しかし、清代に国境地域の警備のため、東北部から新疆へ移住した一部の錫伯族の人々の子孫が新疆ウイグル自治区の察布査爾錫伯自治県などにおり、いまも満州語を話し、新聞もある。その満州語を錫伯語という。したがって満州語は、死滅してしまった言語なのではない。(池上 1994)

この池上の記述をもとに、「満語学叢書刊行之辞」を読むと、最初のパラグラフにある「半世紀ヲ多ク出デズシテ満語ハ自ラ廃語ニ帰シ」は正確ではない。渡部は廃語の例を「希伯来語及ビ其他ノ言語ト運命ヲ同フスル不幸」とヘブライ語をあげて説明している。それは上でみた「大和民族之故国私考」を連想させる。

渡部が指摘する「今ヨリ約三百年前、満人ノ蒙古文字ヲ採用シ多少改変ヲ加ヘ、コレヲ以テ自己ノ言語ヲ写セル」について、再び池上の説明を引用しておく。

満州語を書き表すのに、満洲族は 1599 年清の太祖の創案で蒙古字を用いることになり、これを無圏点満州字とよぶが、1632 年、それに丸や点を加えて改良した満州字が達海によってつくられ、前者と区別して有圏点満州字とよぶ。初期の清朝の記録である「満文老檔」のさらに原文書である「旧満州檔」は、その古い部分は無圏点字で、新しい部分は有圏点字で書かれている。有圏点字による満州語文献は種々豊富に残っており、清代の膨大な量の行政書類のほか、清朝の歴史を記した『満州実録』のような史書などもあり、一方「四書五経」あるいは『金瓶梅』など、中国語からの多くの翻訳がある。(池上 1994)

渡部が示す文字は有圏点満洲字である。なお、渡部が「満語学叢書」として出版予定の書を巻末に掲載しているが、そこには「満文詩経」や「満文四書」が取り上げられている。しかし、実際にはその出版はおこなわれていない。

渡部が宣教師を希望していたことはすでに上でみた。「英国聖書会社ハ莫大ノ資金ト労力光陰ヲ費シテ、満文四福音書ヲ翻訳刊行シ希教ノ用ニ供セリ」と述べているが、キリスト教徒としての関心の一端をみた気がする。ただし、渡部はその満文福音書を研究の対象とはしていない。あくまでも清朝時代の満洲文語の文法を記述することを目的としている。キリスト教的バイアスをなるべく少なくしようという渡部の努力は大いに評価すべきである。

次に「同胞ニシテ満語ヲ学ビ外人ノ出版ニ先ジ辞典文典ヲ編セシハ蘭語通事ノ高橋氏アリ」と指摘している。この高橋氏とは高橋景保のことである。そして「其志ノ遠大ト其努力ノ壮大ナル、敢テ他邦ノ学者ニ一歩ダモ譲ラズト雖ドモ、氏ノ心血ヲ注ギテ成セル原稿ノ一朝烏有ニ帰シ、僅カニ満文随筆ノ一巻ヲ残シタル」と述べている。

じつは、高橋景保の満洲語研究については上原久(1962・1963・1964)の研究がある。渡部の「辞」に描かれた高橋景保には、上原(1965:4)がまちがいを指摘している。まず「蘭語通事ノ高橋氏」とあ

るが、「高橋景保は蘭語通事となったことはない」こと、「僅カニ満文随筆ノ一巻」とあるが、「正しくは「満字随筆」」で「景保の著述が「満字随筆」の 1 冊でなく、幾多の著述を残している」ことを注で述べている。渡部が満洲語を始めたのは間島であり、高橋景保の文献調査ができる状況でないことを考えると、致し方ないであろう。

ダーウィンの進化説が導入されると、自然淘汰を優勝劣敗という部分だけが強調されて、すべての分野に当てはめられていき、言語もこの優勝劣敗の運命をたどると考えられていた。渡部が「不完全ナル言語又ハ劣等人種ノ言語ハ漸ヲ追フテ向上シ、或ハ人種ノ滅亡ノ結果死語廃語ニ属セントスルハ止ムヲ得ザル者ナリ」というのは、その当時の考え方を反映している。しかし、満洲語については「邦語ト語族ヲ同フスル隣邦」言語であり、「将ニ廃滅ニ帰セントスルハ、大ニ惜ム可キニアラズヤ」と述べて、満洲語研究の重要性を訴えている。

ここで注目したいのは、渡部が満洲語と日本語が同じ語族に属すると言っていることである。かつて「大和民族之故国私考」では「日本人＝ヘブライ起源説」を支持し、それが掲載された『史海』の主筆である田口卯吉は「日本語＝アーリヤ語起源説」を展開している。しかし、そうした日本語起源説はこの時点では取り下げ、満洲語と日本語が同じ語族、つまりウラル・アルタイ語族に属するという立場を取っている。渡部『満語文典』はメレンドルフに依拠しているが、Möllendorf (1892) をみるかぎり、満洲語の帰属する語族への言及はない。この本の出版にあたり、白鳥庫吉や中目覚から指導を受けたというから、彼らからその当時の学会での定説であった、日本語がウラル・アルタイ語族に属するという説を知ったのかもしれない。

そして、いよいよ満洲語を学ぶきっかけが語られる。「射利ノ目的ヲ以テ女真ノ故地、即清ノ発祥地ト称スル問島ニ来」[24]たが、「満人成蔚氏ト相知リ、日満語学ノ交換教授ヲナセリ。コレ余ガ満語ヲ研究スル第一歩トス」とある。「射利の目的」が何なのかが語られていないが、その後は「射利ノ念ヲ棄テ専ラ満語ヲ修メテ文学界ニ益セント決心セリ」という。渡部(1922a)では、朝鮮人への伝道が目的であるかのように語られていて、布教伝道ならば射利とは言わないであろう。何か「儲け話」のようなものが背後にあったのかもしれない。あるいは、単なる渡部流のへりくだった表現なのかもしれない。いずれにせよ、推測の域を出ない。

ここまで渡部が家族について語ったことがなかったが、ここで妻の死に言及している。「越テ二年余ガ志ノ将ニ緒ニ就カントスルヤ、妻ハ祖先ト共ニ故山ニ永眠シ、次女ハ慈母ヲ失ヒ又父ノ異郷ニ客タルヲ以テ、日夜独リ悲嘆ニ沈ム。幸ニ義兄ト長女ノ為メ教養セラルノコトトナリ、再ビ東都ニ上リ父ノ成効シテ帰朝スルヲ待ツ」と記している。つまり、間島に入って二年余り、1910 年頃に妻は亡くなったが、妻の兄と長女が次女の面倒をみたということであろう。

渡部は間島で写真業を営んでいたが、その苦しい生活を吐露している。「然レドモ余ハ無資無産ノ徒、終日コレガ研究ニ没頭スルヲ許サズ、故ニ未熟ノ技ヲ売リ辛フジテ糊口ノ資ヲ得」とあり、後に『満語文典』を出版した時のことを、「当時余は現時の如く赤貧洗ふが如くなりし故、満文活字の製作迚も得て望む可くもあらず、鞭便を旨とし、自ら鉄筆を揮ふて原稿を書き、謄写版を以て自ら印刷せし」(渡部 1926:1)と述懐している。しかし、「窮乏ニ臨ンデハ仁人ノ恩恵ニ浴シ、書籍ノ必要ニ際シハ篤志ノ

[24] 金(2017:71)「射利ノ目的ヲ以テ」以下をゴシック体にしたうえで線を引いているが、渡部がその筋の人間であることを強調したがっているようにみえる。同じテキストを読みながらも、どこを強調するかで読みが変わってしまう例である。他山の石としたい。

贈与ヲ蒙リ、其ノ研究ヲ継続シテ今日ニ及ビ」とあるのは、ひとえに渡部の人徳がなせる業だと思うのだが、いかがであろうか。

満洲語の研究についての比喩が面白い。「例ヘバ地中ヨリ出タル一坐ノ土偶一片ノ器物モ、或ハ人類或ハ考古学者ノ為ニハ貴重ノ材料タル如ク、野人胡族ノ言語モ言語学者又歴史家タル人ニ対シテハ大ニ研究スル可キ価値ノアルヲ認メ、聊タリト雖ドモ我ガ学界ニ貢献スル所アランコトヲ期」すと記している。近年、文系の学問が役に立たないと非難されることがあるが、誰にとって何が役に立つのかという議論がなく、すべて押しなべて「グローバルスタンダード」という名のもとに「役に立たない」と決めつけることがいかに危険であるか。いろんな人がいろんなものに関心を寄せ、それを認め合う社会であってこそ学問は育つ。この渡部の比喩を読んでいて感じた次第である。

「辞」に出てくる鈴木要太郎は 1909 年 11 月に間島日本総領事館が龍井に設置されたときの代理総領事、1919 年の三一独立運動が起きた時は総領事だった人である。その人を通じて白鳥庫吉に『満語文典』の草稿をみてもらったということなのだろう。なお、渡部(1917)の「緒言」には以下の文言があるので、引用する。

余ガ満漢日対訳辞典幷ニ本文典ヲ編輯スルニ当リ間島総領事鈴木要太郎氏朝鮮総督府警視末松吉次ヨリ甚大ナル援助ト文学博士白鳥庫吉氏及ビ広島高等師範学校中目文学士ヨリ深甚ナル指導ヲ蒙レリ爰ニ満腔ノ熱誠ヲ以テ此ノ恩恵ヲ感謝シ併セテ我ガ窮乏ヲ助ケラレシ仁人ニ感謝ス

鈴木要太郎と白鳥庫吉はすでに「序」のなかに名前があった。新たに名前があがった末松吉次(1879-1951)について、「1911 年より朝鮮総督府警視、朝鮮駐箚憲兵隊司令部付憲兵中尉であった末松吉次は、1914 年 10 月間島総領事館派遣を命じられる」(宮田節子監修 2001：261)とあるので、渡部(1918)の出版当時に間島総領事館に派遣されていて、渡部に会ったのであろう。もう一人「広島高等師範学校中目文学士」とあるが、これが大阪外国語学校に渡部を招聘した中目覚である。

この謝辞について、前章で取り上げた金珽実は次のように指摘する。

著書の一作品目の出版に携わった肩書から当時の政治的背景が確認できよう。間島地域は法律的には清国領ということで、日本の領事館が設置されたが、朝鮮人が多く住んでいることで朝鮮総督府も深く関わっていた。金(2017:72-73)

この記述には正直驚いた。渡部の出版は自費出版で、しかも自分で鉄筆を揮って書いた謄写版である。この本の出版に日本の在間島領事館と朝鮮総督府がかかわったわけではない。たまたま鈴木総領事と末松警視が個人的に渡部を援助しただけにすぎない。一度、胡散臭いとレッテルを張られ、日帝のスパイとみなされると、『満語文典』ですら植民地支配の道具とみなしてしまう。これでは硬直した思考しか育たないのではないか。

以上、「辞」について述べた。

渡部薫太郎の満洲語研究への意欲は衰えることなく、冒頭であげた『亜細亜研究』のいくつかの号で満洲語や女真語の研究を発表している。筆者は専門ではないので、これ以上、渡部の満洲語や女真語の研究について述べない。

渡部の研究について、石濱は「共に労力繁き整理編纂に大体は止まってゐる」(石濱 1936:93)と述べている。また、満洲語学者である上原は以下のように指摘する。

総じて言えることは、言語学的な基礎教養を身につけていないことが、折角の満州語の知識を、実用的語学の範囲に止めて来たのである。文典をはじめとする諸研究が、充分に理論付けられていないし、体系付けられていないことの原因が、ここにある。もっとも言語学的理論が現在ほどは普及してはいなかった当時にあっては、正規な学問の道程を辿ったのでない渡部にとって、あれ以上を希望することは無理であろう。彼の経歴からするならば、むしろ誠に敬服すべきものでさえある。普通なら著述の一つや二つは達成をみているはずの 48 歳という年齢で、言語の学習に発起するということさえ異常であるのに、その満州語に注いだ情熱は年一年と激しく、あらゆる逆境を越えて、ひたすらその初志を貫いて一生を終えたその生涯は、ただ頭の下るだけである。その尊い学問に無限の敬意を捧げつつも、なお批判の言を述べざるを得ない所に、学問の道がある。個々の面では見当違いの言を述べた点があるかも知れないが、満州語の発展へ一生を捧げた身には、この拙論もまたそうした面を担うものとして、許されるであろうことを祈るものである。(上原 1967:60)

この上原の言をもって、この章を終える。

６．渡部のその他の著作

渡部薫太郎の「論著目録」が石濱の追悼文に掲載されている(石濱 1936:94)。

すでに取り上げた渡部(1893・1922a)を除いて、「論著目録」から漏れたものを以下にあげておく。ただし、渡邊薫太郎名の著作がある。最初は別人かと思っていた。しかし、『史学論叢：内藤博士頌寿記念』に掲載された論文「琉球国進貢表と西域荘阿図降表に就て」が渡邊薫太郎名で出版されているが、石濱の「論著目録」に掲載されていることを高田時雄京都大学名誉教授からご教示いただき、同一人物だと認定した次第である。

渡部薫太郎[25] (1922b)「支那に於ける漢字制限の話」『エポック』1:34-38。

渡部薫太郎(1925)「朝鮮布教の急務」『道乃友』4 月 20 日号：47-50。

渡部薫太郎(1926b)「満洲ニ於ケル満人ト其言語及書籍」『海外視察録』6:1-11[26]。

渡部薫太郎[27](1928)「満洲民族とその言語」『満蒙』9(9)(101):17-27。

（こちらは『論著目録』の七、Manchu Tribe and Its Language.「昭和三年九月の雑誌『満蒙』に此原文あり」と但し書きがある）

満洲語関連以外の渡部(1922b・1925)を取り上げておく。

渡部(1922b)は漢字について書かれたもので、ここで紹介したい。順次みていきたい。なお、付録２として、引用文全文を掲載しておく。

---

25 渡邊薫太郎名での論文であるが、渡部薫太郎で統一した。

26 国会デジタルコレクションからダウンロードができる。

27 ただし、目次では渡邊薫太郎になっている。

冒頭に「現今支那で使用して居る字数は大略二万程あるし、日本では一万五千に近く、朝鮮に於ては全龍玉篇に現はれた文字は日本の辞書にあるよりは少ない」(34 頁）とある。

ウィキペディアによると、康熙字典(1716)で 47,035、中華大字典(1916)で 48,000 というから「大略二万程」という数字がどこから来たのか。また、日本では「その数は 5 万を超えるが、実際に文献で用いられるのは多くて 6000～7000」(コトバンク)とある。朝鮮の全龍玉篇は『全韻玉篇』のあやまりである。以下に、ソウル歴史博物館の日本語による説明を引用する[28]。

《康熙字典》の体裁を模して作った漢字字典である。主に日常の常用漢字を選び掲載したために、文字の数は《康熙字典》の約 5 分の 1 ほどだ。序と跋がなく、編著者と編纂連帯は正確にわからないが、近世に入ってから韓国で一番権威をもつ玉篇の一つとして広く使われてきた。全韻という名前そのものが《奎章全韻》を指し示すものであり、《奎章全韻》の附篇として編纂されたとみられる。註釈は簡単であり、ハングルで韻をつけ、漢詩を作る人のために四声の韻字をつけてある。正祖(または純祖)の時に初めて刊行された。2 巻 2 冊の印本である。（ソウル歴史博物館）

渡部の「日本の辞書にあるよりは少ない」というのは康熙字典の 5 分の 1 なら 8000 字ほどなので、まちがってはいない。

次に「現今支那に於ては、化学上の術語、例へば加里とか那篤漠」とある。「加里」（カリウム）は問題ないが、「那篤漠」は「那篤留謨」（ナトリウム）の誤りだろう。

「電報などを打つ場合には、「電報新編」とか云ふ辞書に依つて、其の範囲内の文字を使用して打電することになつて居る」とある。この「電報新編」はグーグルサイトからダウンロードできる。それぞれの漢字に数字が割り当てられていて、その数字を送るともらった方も「電報新編」でその数字を漢字に変換するというものだ。仮名のような読みがない漢字ではいわば暗号化して送るしかなかったのである。

渡部の議論の中心は「之(＝漢字)を廃するか又はアルフアベツト系の文字に改めるか乃至は漢字の使用を滅ぼさねばならぬと主張する」人たちのことであり、渡部自身も漢字廃止に向かうとみている。まず中国語には朝鮮語の諺文や日本の仮名のような表音文字がないことを指摘した後、中華民国設立後の注音法のことを述べている。その後はローマ字表記について、「マールボロウの支那語独習書」から長々と引用している。

マールボロウの支那語独習書は正式には John Darroch (1916) Chinese self-taught by the natural method：with phonetic pronunciation：thimm's system を指す。このシリーズが Marlborough's self-taught series と呼ばれているために、「マールボロウの支那語独習書」といわれるゆえんである。こちらもインターネットからダウンロードできる。

渡部の朝鮮、中国の比較が面白い。中国では「文字を解するもの三に対して文盲者七である」が、「朝鮮に就て見ても、漢字を以つて姓名を書き得ないものは約千分の十位であつて、支那人よりは文盲者が少ない」と指摘している。一方、「支那人はその比率こそ少ないが流石に漢字圏丈けあつて、文

[28] 以下からダウンロードした。
https://museum.seoul.go.kr/www/relic/RelicView.do?mcsjgbnc=PS01003026001&mcseqno1=003050&mcseqno2=00000&cdLanguage=JPN

字を解する者は文字を知ることが深い」が、「朝鮮人はその比率に於て支那人を凌駕して居るが、文字を知ることが浅い」と述べる。中国や朝鮮人の多い間島滞在が長い渡部ならではの観察である。

議論はふたたび注音法に戻ったあと、注音法は最初清朝時代に考えられたものだが、「民国七(1918)年十一月教育総長の名を以つて注音法の採用を発令し、八(1919)年四月に再びその規則を制定して支那全土に領布した」と書いている。間島に居ながらも教育政策に精通していたことがわかる。

しかし、「漢字全廃は未だ前途遼遠」であるという。つまり中国語の南北方言差があり、なかなか統一した表音法が確立しないと述べ、「若し注音法の理想が、予期の如く漢字を駆逐して、国音の統一を実現することが出来るとすれば、朝鮮に於ても日本に於ても漢字は廃され或は諺文となり或は仮名乃至ローマ字とならざるを得ないであらう」となかなか過激な結論である。最後には「漢字を日常の使用より全く駆逐し去るの日は、果たして支那が先であらうか、日本が先であらうか」と結んでいる。渡部がこの文章を書いて 100 年が経つ。しかし、中国でも日本でも漢字は廃止されていない。この現状を天国にいる渡部はどうみるであろうか。

さいごに、渡部(1925)を取り上げる。こちらは付録３として巻末に全文引用しておく。

渡部薫太郎は 1924 年 5 月に日本に帰国して、大阪外国語学校で満洲語を教えることになる。それと同時に、天理外国語学校でも朝鮮語を教えはじめる。その時の講演を起こしたものが渡部(1925)である。

冒頭に、「明治三十八(1905)年二月従軍して渡鮮しましたのが、私に取つては第二回目の渡鮮で、夫より引続き昨年五月の半ばまで、朝鮮人の間に起臥し、公私の仕事をして居りましたが、昨年五月下旬、二十年振で内地の土を踏みました」とある。渡部(1922a）によると、1902 年に馬山浦に上陸したのが 1 回目、1904 年 4 月が 2 回目、1905 年 5 月が 3 回目とある。また、略年譜によると、陸軍通訳になったのは 1904 年 2 月である。とすると、「明治三十八(1905)年二月」は「明治三十七(1904)年二月」の誤りなのかもしれない。

そして、「私は朝鮮語を教ふるのが第一の目的ですが、第二の目的としては、後日大任を負ふて朝鮮人間に布教せんとする学生諸君の為め、朝鮮総督府の施政方針なり、朝鮮人に堅実なる信念を抱かしめるの必要なるを、諸方面より述ぶる積りです」と述べている。渡部は天理教徒ではなく、敬虔なキリスト教徒である。しかし、天理教布教のために、この講演をおこなっているのである。実際、大谷(1996:169-170)には、この渡部の講演が引用されていて、渡部の講演を天理教の主張とみなしている。

まず、日本と朝鮮の歴史的関係を強調し、「扨太古に於ては出雲族と朝鮮との交通あり、上古に於ては王仁を始めとし、其の他多数の帰化人が来ました」と述べている。この「王仁」は渡部(1893)にも登場した。彼にとって何か大きな存在なのかもしれない。そして「中古に於ても両国民の往来があ」り、「近古に於ては、豊臣及徳川時代にも国民の往来があ」り、「明治に及んでは、其の往来が一層甚だしくなり、日韓合併以後は両民族彼此の差別が無くな」ったと位置付ける。

朝鮮人の現状認識がなかなか面白い。「此の民族が上に善良なる為政者を戴いてゐたならば、国民の文化は益々増進したのには相違ないが、為政者の適当なる者を得なんだ結果、文化の発展を阻止せられ、国民は塗炭の苦に陥り、如何ともなし得ざる状態になりました」と為政者が悪かったことを強調している。また、日韓併合以後、「領土の主権は確定して動かぬ様になつたが、人心は如何かといふと、其の向背が確定してゐない。曰ば表面は平和であるが、裏面に於て反日熱の熾んであつた故に、暴徒討伐の不祥事を見るに到つたのであります。此の暴徒の希望は、即ち朝鮮独立問題の根底は極めて深

く、現今に於ても大人小児の別なく、彼等は之を口にして居る」と述べて、朝鮮独立の気持ちが強いことを指摘する。

朝鮮に於ける宗教を概観した後、その布教者について、「新旧の宣教師にして朝鮮語を自由に語らぬ者は皆無といつてよろしい。翻つて日本の神仏布教者の中に朝鮮語を自由に操り、朝鮮人専門に布教して居る人は幾人かある。恐らく十本の指を折ることは出来まい」と日本の神仏布教者が朝鮮語を学ばずして布教していることに疑問を呈している。そして、「朝鮮布教師の職責に二方面があり、一方は宗教家として人の霊肉の救済を目的とせねばならぬし、他の方は間接的に日鮮融和の実を挙げねばなりません」とし、「自由に朝鮮語を操つり、彼等によく日本を理解せしむ」べきだと説く。そして、「現に朝鮮に於ては新しき宗教の興らんことを望んでお」り、「斯くの如き朝鮮の現状を看取し諸君の内より三千万の朝鮮人を霊肉の二方面より一日も早く救済せん為め、多数の布教者の出でんことを望む」と結んでいる。これだけ読めば、天理教の指導者が天理教徒の布教に向かう人々に訓示しているようである。

さいごに、「諸君に問はんとするのは家族中の大病人と他家の病人と何れを先に救ふ可きか、此れにて私が主張する朝鮮布教問題は尽せりと思ひます」と述べているが、妻の訃報に際しても、日本に帰らず、間島朝鮮人のために、現地に残った渡部ならではの言葉である。

以上、渡部(1925)についてみた。渡部(1922a)と一緒に読んでいただき、満洲語や女真語研究だけでない、渡部の姿を見ていただきたい。

７．おわりに

石濱は渡部追悼文にこう述べている。

屡々の来訪を辱くしたが、談は学術の外に出でた事はなく、老人に有り勝ちの閲歴苦心談などは更に無かった。一意専心自己の研究に没頭せられたる熱心さには敬服に堪へなかった。況んや自著の殆んど全部は皆老年の先生が鉄筆を把っての労作であるに至っては、その気力の旺盛を驚嘆するのみであった。天命を知り、清貧に安んじ、焦らず燥がず、数多の論撰と共に満日字典の稿本を校訂し排印しつゝ老の将に至らんとするを知られなかった先生の思出は余には深いものがある。(石濱 1936:93)

この石濱の渡部像と中見(2016)にみられるような「胡散臭い」とか、「スパイ」とかいった姿がどうにもつながらなくて、渡部の間島時代のことがわかるものが見つからないかと探していた。そして見つけたのが渡部(1922a)である。国会図書館サーチで「渡邊薫太郎」で検索すると、この「間島朝鮮人の宗教及教育」がみつかり、それが小論を書くことになった経緯である。

小論で主張したかったのは以下のことである。

渡部のキリスト教信仰心はとても篤く、宣教師的精神で人生に取り組んできた。布教伝道のため、朝鮮語や中国語を学び、朝鮮人の気持ちに近づこうとしたのだが、当時は政治的に激動の時代だったこともあり、布教伝道に壁が立ちはだかってしまった。そして到達したのが満洲語だった。今や死語となりつつある満洲語を「回春せしめん」(渡部 1926a:1) とすることが宣教師的精神の終結点だった。それが小論でみてきた渡部薫太郎の実像なのである。また、ずいぶん前に渡部(1893)をご教示いただきながら、なかなか渡部薫太郎の人生をたどることもできなかったが、小論で何とかつながったので

はなかろうか。

渡部が「前途に蹉跌を生じ当初の目的を到達し得ざる悲しい運命に陥つた」ことについて、注で示したように、その当時の学生の証言で「四十才を過ぎて肺病の宣告を医師よりうけ」とあるが、その証言の真偽については今の時点ではわからない。今後の課題としたい。

参考文献

李徳周・常石希望訳(2008)「初期韓国教会の民族教会的性格（三）」『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』45(18):123-140

池上二良(1994)「満洲語」『日本大百科全書』(以下のサイトから閲覧)

https://kotobank.jp/word/%E6%BA%80%E5%B7%9E%E8%AA%9E-137954

石濱純太郎(1936)「故渡部薫太郎先生」『東洋史研究』2(1):92-94。(高田編(2018:97-100)に再録)。

伊藤英人(2000)「明治十四年版外務省蔵版「交隣須知」　浦瀬裕校正増補」（以下のサイトより）

https://www.tufs.ac.jp/library/top/about/exhibition/200006-2/

植田晃次(2009)「日本近現代朝鮮語教育史と相場清」『言語文化研究』35:1-20。

上原久(1962)「高橋景保の満洲語学-1-」『埼玉大学紀要 人文科学篇』11:8-50。

上原久(1963)「高橋景保の満洲語学-2-」『埼玉大学紀要 人文科学篇』12:1-34。

上原久(1964)「高橋景保の満洲語学-3-」『埼玉大学紀要 人文科学篇』13:21-84。

上原久(1965)「渡部薫太郎の満洲語学-1-」『埼玉大学紀要 人文科学篇』14:1-17。

上原久(1966)「渡部薫太郎の満洲語学-2-」『埼玉大学紀要 人文科学篇』15:1-60。

大谷渡(1996)『天理教の史的研究』東方出版。

長田俊樹(2017)「はたして言語学者がふがいないのかー日本語系統論の一断面」井上章一編『学問をしばるもの』思文閣出版。10-29 頁。

長田俊樹(2021)「大阪言語学会要覧について」『KOTONOHA』228:1-19。

長田俊樹(2022a)「大阪言語学会会報について」『KOTONOHA』230:1-32。

長田俊樹(2022b)「静安学社の講演について」『KOTONOHA』231:1-30。

長田俊樹(2022c)「石濱シューレに集う人々ー四半世紀後に」『日本研究』64:123-158。

許金生(2012)「「満蒙」における軍用資源調査に関する一考察ー日本軍の馬調査を中心にー」『社会システム研究』24:61-77。

金珽実(2017)『満洲・間島における日本人』花書院。

倉田明子(2020)「近代中国「間島」地域におけるキリスト教」『Quadrante』（東京外国語大学海外事情研究所）22:25-33。

国際法学会(1910)「間島巡警暴行の顛末」『国際法雑誌』9(3):233。

高田時雄編(2018)『石濱純太郎　続・東洋学の話』臨川書店。

陳南澤(2019)「明治前期に刊行された『交隣須知』の韓国語文の比較研究」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』4:72-87。

津田喜代獅(1972)「その頃の思い出」大阪外国語大学同窓会五十周年記念誌編集委員会編『きんきら 50 年ー大阪外国語大学同窓会五十周年記念誌』大阪外国語大学同窓会。206-207 頁。

中見立夫(2016)「討論（のなかの発言）」『OUFC ブックレット』9:43-56。

日本電信電話公社関東電気通信局(1968)『関東電信電話百年史．上』(以下のサイトより)

https://shashi.shibusawa.or.jp/details_basic.php?sid=13310
宮田節子監修（2001）「未公開資料　朝鮮総督府関係者　録音記録（2）朝鮮統治における「在満朝鮮人」問題」『東洋文化研究』3
渡部薫太郎(1893)「大和民族之故国私考」『史海』27:102-104。
渡部薫太郎(1918)『満語文典』満語学叢書発行会。(国会)
渡部薫太郎(1922a)「間島朝鮮人の宗教及教育」在外朝鮮人事情研究会編『北満及露領朝鮮人事情』在外朝鮮人事情研究会。35-55 頁。
渡部薫太郎（1922b)「支那に於ける漢字制限の話」『エポック』1:34-38。
渡部薫太郎(1925)「朝鮮布教の急務」『道乃友』4 月 20 日号：47-50。
渡部薫太郎(1926a)『満洲語文典：訂正』大阪東洋学会。(国会)
渡部薫太郎(1926b)「満洲ニ於ケル満人ト其言語及書籍」『海外視察録』6:1-11。(国会)
渡邊薫太郎(1928)「満洲民族とその言語」『満蒙』9(9)(101):17-27。

Grayson, James H. (1999) The legacy of John Ross, *International Bulletin of Mission Research* 23:167-172.
Hager (1900) In memoria: Rev. Martin Schaub, *Chinese Recorder* 31:515-517.
MacGillivray, D. (1907) *Descriptive and classified missionary centenary catalogue of current Christian literature, 1907 continuing that of 1901 (Wen-li and Mandarin)*. Shanghai: Christian Literary Society.
Möllendorf , Paul Georg von (1892) *A Manchu Grammar: with Analysed Texts*. Shanghai: American Presbyterian mission Press.
Reusch (1900-01) The Rev. Martin Schaub, *China Review* 25:52.

付録 1

間島朝鮮人の宗教及教育

間島　渡部薫太郎

(35 頁)（以下、原文の頁ナンバーを付しておいた）

第一

間島に於ける我が同胞朝鮮人は近年大に増加し、或は三十万と云ひ或は四十万と称するも、正確なる統計に到りては得て知ること難い。然し、日に月に増殖の一方であるから何時までも現在の儘でなく、軈かで（やがて）は六七十万の巨数に達するであらう。仮に最小限度の三十万として其人々は間島一千二十万方里間の平野山谷、便不便の嫌なく住居しつつある。移住の原因に就ては種々あらんも茲には間島朝鮮人の宗教と其子弟教育の状況を述べて見たいと思ふ。

先づ其順序として述べ度きは、予が朝鮮人の宗教と其教育に意を注ぐやうになれる動機である。予は二十歳前後に際し英国聖公会宣教師より洗礼を領け信徒の列に加はり神学生となつた一夕、同窓学生が相集まつて卒業に於ける伝道地を選定することになつた。或者は北海道を選び、或者は台湾を希望し、又或者は支那を好み、或者は日本内地と定めたが、予は朝鮮には天主教あれど新教は其派別を問はず未だ伝道に着手せぬ為め朝鮮伝道の希望を懐いた。之は今を距る約四十年前、即ちメソヂスト

宣教師アンダーウツト氏の渡来に先んずること四年であつたと思ふ。当時、学校にては日々学科を修めると云ふものゝ、予は朝鮮の現状に暗らく又朝鮮人には一人の知己も有せず、且つ朝鮮語に就ては全く盲目的であつたから、其際釜山領事前田献吉氏に書を寄せ英仏日文を論せず、朝鮮語を学ぶに必要なる書籍の周旋を求めて早速「交隣須知」と云ふ書籍を手に入れたが、偖て大阪には之を教授し呉るゝ人がないので時々前田氏に書を致して不審の点に付き教を乞ひ所謂通信教授によりて研究した。実に当時朝鮮語を学ぶには書籍もなく、又朝鮮人に接するにも今日の如く自由を得なかつたのである。然るに、突然として予が前途に蹉跌を生じ当初の目的を到達し得ざ(36 頁）る悲しい運命に陥つた。けれども予が脳裏よりは断じて朝鮮伝道と云ふ四文字を抹殺することは出来ない。其後明治三十五(1902)年中、公用にて馬山浦に上陸したるは、予が朝鮮に足跡を印する最初であつて、其際は釜山在留の宣教師ロツス氏と相識り日夕往来し初めて朝鮮伝道の難易を知つたのである。当時、予には他の業務がありし為め、一身を宗教運動に委すること出来なかつたが、二回目の渡鮮は三十七(1904)年四月、三回目は三十八(1905)年五月で会寧の地を踏みたるは同年九月二日即ち日露戦役の終期であつた。然れども戦争収束直後の折柄、布教伝道の時期にあらざる為め単に豆満江付近朝鮮人の実生活を見学したに過ぎぬけれど、予に取つては実に又得難い印象を収めた予備時代であつた。軈がて同行の友人は日本内地に帰りしも、予は年来朝鮮人間の伝道を希望し居れる事とて更に進んで朝鮮の極北穏城に赴き日鮮官民の援助の下に日語学校を創設し日本語の教授を開始したのは実に明治三十八(1905)年十二月二十一日で、当時元山大韓教会の教役者は巡回伝道を試みつゝあり、予も時々其教会に出入したのである。それより明治四十(1907)年六月穏城を去りて会寧に出て四十一(1908)年二月間島に入り今日に及んで居る。勿論此長歳月の間、何等為す所なく碌々として経過せるには相違ないが、十数年間、朝鮮人と往来し深く其心理状態や若くは外国宣教師の伝道方法を実地に研究して大に得る所あつた。のみならず、職業の為め村落に出入したる際なども、必らず余暇を以て福音を伝へつゝあつたが、寧ろ専門的に宗教運動に身を投ぜん希望は日に日に切なるもの（で）あつた。けれども悲しい事には此福音布教に就ても誰一人の後援者なく全く孤立の状態なれば彼の保維か天幕を造りながら伝道せる如く一の職業を提げてパンを得つゝ生命を繋ぎ伝道したのである。元来、間島に於ける日本人には耶蘇教徒も居るなからんが、誰れ一人として其信仰を公言するものなく、予は全く四面楚歌の歎に堪へず、従つて日本人の信者と交際する機会もなく支那人及朝鮮人の信徒を交友として、暫く時期の到来を俟つて居た。然るに例の万歳運動以来は胸に一物ある朝鮮人か、四方より間島を目蒐けて蝟集し来り、いづしか間島は挙げて不逞徒輩の巣窟と化したので、遂に我が軍隊の出動討伐とあつた。其不逞徒輩中には純然たる耶蘇教もあれば求道者もあり、又教義に暗らき信徒もあつたには相違ないが、之が為に耶蘇教其者を目して直ちに国賊とか将又邪教と称するに至つては耶蘇教の為めに大に弁護の(37 頁)地位に立つの必要を認め、同時に布教伝道の方法を講究するの急務を痛感せざるを得ぬのである。一体布教とか伝道と一口に云へば甚だ容易のやうに思はるゝが其実際は仲々の大事業にして到底一朝一夕に其効果を収めんとするなきは勿論、内地人にありても徒らに批判論難のみを事とし又此重任に当るべき熱心の教役者もないのである。斯くて一日を経過すれば一日の損失あり。宿年の志望に向つて第一歩を踏み出すは正に此時期を措いて他にあらずと信じ、いよいよ其決心を堅め何事をも打棄て遂に大正二年一月第一日曜日を以て予が目的に対して前進を開始したのである。併しながら素より相談相手とてはなく、又後援者即ち信徒の援助もなく、全く単身独歩なる為め万事に於て、進歩の遅々たるは覚悟の前であるが、若し予に大能の手の加はるに於ては又何の難き事があるべき実に此確信を持

して居たのである。

第　二

我が四国大の間島の地に住する朝鮮人は約三十万、支那人十万内外、日本人は僅に千五百位で鮮支人は共に逐年其増加を見るのである。顧みれば朝鮮人に貧富の別あるは勿論、常民両班もあれば得意もあり失落者もあり、又所謂親日派もあり排日派もある。就中、中華民国人と自称し又露西亜人と吹聴し居る一味党徒もありて其種類の複雑なるは実に意表の外に出づるか要之、満足派と不満足派の二者に外ならない。前者は大に達観せるものゝ如く只管自己の境遇に満足し一身生活の安定をのみ希望し、後者に到りては回天の事業、我が双肩に在りと豪語し所謂志士を以て自ら処り現生活に満足せざるものにて、之は間島一円の朝鮮人を色別したのである。併も翻つて其信仰する処の宗教は如何、天か仏か将又た宇宙の大霊かと云ふに素より人々によりて其信仰を異にし、又其宗教に乗じて信仰を利用せんとする無宗教の野心家もあり又耶蘇教徒も居る。予は前述の如く耶蘇教となるは勿論であるが、某新聞社通信員たる関係もあり、旁々朝鮮人の宗教に対する態度を記述するに就ては決して偏頗に陥らず、極めて公平に批判の筆を揮ふ考へである。今間島朝鮮人の宗教別を挙くれば朝鮮教、東学教、檀君教、儒教、新旧耶蘇教等に分つべく、此東学教と云ふは予が仮に命名したるもので、彼の東学党首領崔済愚が提唱せるもの即ち侍天教、天道教、青林教、済愚教等の分派を有する、所謂儒仏仙耶の混合教である。（38 頁）如くんば崔済愚は元来天主教求道者の一人でありし由なれば、其信仰や教理に耶蘇教趣味の帯色を見るは決して無理からぬ。寧ろ当然の帰趨と信ずる。

（一）侍天教　侍天教は旧一進会と深き関係あり。数年前移住の会員によりて輸入されたが、当時は破竹の勢ひを以て宏壮麗美なる五層堂や其他数棟の建築物を為し毎月供納の試米も尠なからず、且つ信徒は大に活動したので間島の宗教は耶蘇教か侍天教かとまで言囃され、教勢の進張見るべきものありしものゝ、軈がて内部に幾多の事情を生じたので中途一頓挫を来たし、当初予想の如き発展を為さゞるのみならず、教徒の信仰を培養する者其人にも乏しくなつたが、其後京城より相当の指導者が来たりで布教に努力し辛らくも今日に及んだのである。元来一進会と云へば親日派のチャキチャキである為め、彼の万歳騒ぎに際し従来の主義方針を打棄てゝ之に加担すると云ふ次第にも行かず、只傍観の態度を取りたれば間島に於ても侍天教徒として万歳運動に参加せるは一進会の脱退者に過ぎなかつた。万歳騒ぎに対しては前顕の如くであるが、侍天教其者が果して朝鮮人威化の実力を有するや否に就ては大に研究の余地あると思ふ。元来東学党は西学即ち天主教に反対して起れるものから、東洋は東洋人の東洋と云ふが如き思想は果して今日の世界の大勢に適合するや否や、崔済愚が其信仰主張を公表したるは朝鮮が未だ鎖国夢裡の時代なれば東洋の価値を発揚すべき手段とせんか。多少買ふべき余地もあるが、併も其見識と眼孔とを批判すれば寔に井底の蛙たるを免がれぬを如何せんや。若し彼を今日に生存せしめば、惟ふに其信仰を改善するか、或は其主義を廃棄せしやも知れぬ。彼の所謂東洋主義は事大主義と相反すと見ゆるも、信徒は教儀外の信条の如く奉じ居るもの這は今日の大勢に背反するものにあらざるかを信ぜらる。間島には斯派に属する信徒は数万人ありと云ふも之を統轄するのは第一に人徳即ち人を威化する徳望の所有者が必要である。若し斯人ないとすれば教勢を発展せしむる事は蓋し容易でなく、寧ろ退歩の気味となれば之を挽回せんには相当の人物を必要とする次第と思ふ。

（二）天道教　天道教と侍天教とは元来兄弟の如き間柄で侍天教と相前後して間島に輸入された。当

初は其教勢萎廑として振はざりしも近年稍々活気を帯び来る。箭先き、京城に於ける同教の政治的色彩の濃厚となるに伴ひ漸次教勢は振張して終に間島の万歳騒ぎに多くの加担者を出したので爾来衆人環視の標的となつた。（39 頁）さるにても教義の解釈に原因するか、其教徒間には大に新思想の渥溢を見、同一教義を二様に解釈し本来の宗教団体を政治的圏内に投入するかの傾向あつて集会の如き少しも宗教家らしき所なく恰も政党政社の観がある。要するに信徒は天の本意を諒解するよりも、先づ天道の二字に眩惑されて居るかの如く予の眼に映じつゝある。既に高級階級が然りとせば下流の之に倣ふは当然の次第で、されば政教の分離を断行して有徳の人物、即ち天を己に実現し得るものを必然要求するは侍天教と異なる所ない。尚ほ若し同教にして政治的色彩の凋褪を見ざるからは神聖なる宗教界の一隅に永く割拠するに就ては多少の非議は遁るゝ能はざる所であらう。

（三）青林教　青林教は世人の既に知悉する如く済愚の字を取りて教派の名称とせるもので前顕侍天、天道の二教とは切ても切れぬ関係がある。一昨年の不逞鮮人討伐以前には、此教派の名を耳にしたる事ないが、併も討伐の真最中に青林教は親日の大義を標榜して起こりたるものなれば此教派に帰依し信徒とならんか。則ち我々親日派は銃丸の見舞を受けずとの迷信から、日々相競うて我れ勝に其門に伺候し、名簿に姓名の登録を乞ひ同時に門牌の分配を受くるもの多く、約二十万二達したさうである。斯ては青林教を信ずると云ふよりも寧ろ、青林教は利用されたる観ありて取りも直さず剣難除の護符となつたので是等の迷信は姑らく恕すとするも、一たび此教派に帰依せるものは恒久的に其信仰を持続し、又其指導の任にあるものは永遠に其信仰を培養すべく努力せざるべからざるに毫も去る事ない。されば不逞鮮人討伐の終了と与に、遽然として教勢衰頽し乍ら門前雀羅を張るの観を呈せるは蓋し当然の始末にして、折角の努力も悉く水泡に帰したのである。宗教は特に其人を得ると得ざるとは其盛衰消長に関するところ頗る多大なれば、相当の人物を得て紛議を醸さゞからは信徒の帰依を繋ぎ止めるは左程の難事ではあるまい。今仮りに青林教の信者を十五万と目算し、之を我が陸軍編成に擬すれば幾師団ともなるが由来、軍隊は絶対的命令を以て臨むにしてもソレ相当の人物を要するは論を俟たざるに、軍隊とは其赴きを異にし信仰と徳とを以て成る宗教団体を統治するには如何なる人物が克く此大なる群れを治理し得るか否かは問はずして知るべし。然るに同教派には其人物なく、加之間島の情勢の変化と与に教勢の次第に不振に陥れるは蓋し当然の帰趨で如何に蔽はんとするも蔽ふべからざる事実である。

（40 頁）（四）済愚教　済愚教は一昨年不逞鮮人討伐の際、保民会と与に間島に入り込み、朝鮮人間に活動を試み一方親日を宣伝したが、教理の根本義が天道教、侍天教、青林教と同一なるのみか、青林教が既に親日を唱道し着々其効果を収め居る時代であるから、同教派に帰依するもの案外に少なく教勢大に振はず、今後は得て知るべからざれど現在は幾んど其存在を疑はるゝの状にある。

右は間島に於ける東学教的系の現勢で之を公平に批判すれば教義外の教義より政治的又は政社的色彩を全然排除して尚ほ一層宗教的信仰を復興するのみか、小異を捨てゝ大同に就き、一の東学教として世に立たざる限りは、充分に其宗教的使命を到達するは困難であらう。実に是等の宗教は仏教の復興、耶蘇教の活動に対しては確実に之と角逐するの成算なきものゝ如く僅に挑戦の創始、特に東洋的宗教として其命脈を保つべきは現代の世界的進歩に微し幾んど累卵の危に等しく、併も其間に於て常に暗闘の絶へざるものある。到底多数の同胞兄弟を教化するは至難である。されば此際兎に角、外に教勢を張らんとするよりも、先づ内に一致和合を求むるは最大の急務であるまいか。

（五）檀君教、大倧教　檀君教、大倧教もあるが、之は他の宗教の如く宏壮の殿堂を構へ、日曜日

には宗教を翻して布教などをなさぬ。静に時々宗教上の書籍を各方面に配布し、所謂文書宣教の方法を講じ居れば、其外観の不振に似気なく意外の潜勢力を有するの観ある。其原因の一とも見るは檀君の二字に憧憬を有して朝鮮の国粋に随喜するものが多く、其信徒となるものゝ如く、されば這は宗教と云ふよりも寧ろ一の学派と見做すべきである。

（六）大成儒教　最近大成儒教と称して儒道に宗教味を混和したるが如きもの出現したが、之を宗教的方面より観察するものもあれば、又単に儒教と見做すものもある。此教派否学派が崔済愚の東学教と連絡して一方新旧耶蘇教に対抗し又他方には新進の仏教に突撃せんとする傾向あるも子怪力乱神を語らすとの宗旨を以てすれば由来大成儒教は宗教か将又学派かその何れに処するものか。

上述は朝鮮人創始に係る宗教にして間島に輸入し居るものゝ概況で、未だ充分悉さゞる所あるは勿論なれど事実を赤裸々に記述し且つ批判したるものである。実に或者は是等を唯一無二の宗教と信じ、又或者は何等か為にする所あるべく帰依せるものゝ如きが、併し数十万の朝鮮人に宗教的慰安を与へ転迷開悟の妙境に入らしむる（41 頁）には此朝鮮的宗教に身を託するを可とすべきか。将又其権威を有すべきか。大いに研究を要する問題と思ふ。這は世人と与に永く研究を継続するの要あり。則ち過去、現在の観察を以て将来に想及する時は大に意見なきにあらぬが开は別に論出する事とせん。

（七）耶蘇教　茲に筆を一転して基督教即ち新旧耶蘇教に移るべし。予が明治四十年夏、間島の龍井に足跡を印した時は朝鮮人家屋は僅々二三十戸位に過ぎぬが、既に矮小なる藁葺の天主堂が厳存し白耳義人の神父が居りて支那人の信者も打集ひ朝鮮人の教徒も来り礼拝する始末で、要するに支鮮人の教会堂の所在地を龍井とも将又六道溝とも云はず朝鮮人は「ヨンツレ」村と称し支那人は天主堂の所在干係より便宜上、天主堂子と呼んで居た。当時の龍井は実に見る影もなき寒村にして、旅人宿もなければ飲食店もなく、勿論郵便電信の機関もあらず。加之会寧と龍井間を往来するものは幾つんど皆無と云ふも差支なき状なるにも拘はらず、神父は藁葺の陋屋に晏然として居住し其使命に努力しつゝあるを見て、神の道に忠実なる将又其耐忍と希望の偉大なるを痛切に感銘せざるを得なかつた。最も是等の宗教的実生活は朝鮮内地若しくは伊犁、新疆及外蒙古に於ても往々見受くる所である。斯て龍井朝鮮人戸口の増加に伴ひ仏国人南神父の来住するありて、聖堂を改築し教勢を拡充して現在の発展を打開し既に間島に於て八千の信徒を得、昨年六月中龍井を去つて黄海道に転任したのである。元来此旧教は昔より今日に到るまで上に法王ありて絶対的教儀の変革を許さゞるのみならず、信徒の言論出版も其教儀に抵触せざるものゝみ之を承認し、又学説に到りても右同様の拘束あつて信徒の言論出版に就ても自由を有せず種々の限定あれど、教徒の信仰は彼の新教徒に比し甚だ堅固である。是等の原因が朝鮮内地に於ける例の万歳騒ぎには旧教徒の加担したるものなかつたとの事である。最も間島には天主教の韓国義民団なるものあり。他の団体と同じく万歳騒ぎに参加せしが当時其神父は全く是等の事実を承知し居らぬさうであつた。开は兎もあれ間島に於ける旧教布教の歴史は支鮮人両方面を通じて二十余年に過ぎぬが、現在に於ては天主教の支鮮人司配は両系に相分れ、即ち朝鮮系の神父は朝鮮人の指導に任じ、吉林系の神父は支那人側の布教に当り居るので朝鮮の天主教歴史と間島朝鮮人の天主教とは深き関係あれば到底分離することが出来ぬ。さるにても前記の如く間島に於て十余（42 頁）年間、布教の任にありし神父は黄海道に去り其後継者として最近独逸修道院の神父が来住伝道して居るが、同神父は頗る考慮する所ありと見え大に面目を一新してのみならず、朝鮮人教育に特別の力を效さんとしつゝあるので今後の活動即ち教勢の振作は恐らく刮目に値ひすべく思はる。一体独逸神父の主義方針の一要諦は「十分に為政者の諒解を求む」と云ふにあるが、さればこそ間島着任早々

先づ我が官憲の諒解を求めたるのみか、或時は両者商議妥全の上、事に当るの行動を取つたのである。之は相互間の誤解を防ぐのさ最良法と云ふべく神父にして既に此覚悟あれば蓋し信徒も亦範を茲に取るは云ふ迄もなき事である。此主義方針を以て一要諦とするに何れの牧師、伝道者にも希望して已まざる処だ。

次に新教即ち加奈陀長老派の教勢に就て述べんとする。先づ劈頭第一に言はざるべからざるは世俗の所謂縄張り即ち伝道区域である朝鮮にも正統派即ちオルソドツク派もあればレベラルクリスチヤニチイ即ち自由派もあるが、就中天主教、希臘教、英国聖公会、救世軍其他一二派を除き、南北メソヂスト、南北濠加の四長老派が連合会派を組織して各派の専有伝道区域を定めて侵略伝道を防止せる結果として間島は加奈陀派の手に帰したる為め他派は之が伝道に指を深することが出来ぬ事となつた。若し万一他教派のものが移住し来る場合には長老派に転属するか、然らずんば自身一人孤城を嬰守するより他に方策がない。されば間島に於ける加奈陀派の教勢偉大となれるは当然の帰結だ。併し此専有伝道には一利一害の伴ふを見遁すことならねば大に考慮要すべく同時に信徒の宗教上の見識も勢ひ博大を欠き加之常に一定の範囲に堕して進歩向上は到底希求すべからざる弊がある。又信者の信仰其者に就て考ふるを真に耶蘇の救ひの極致を理解し其信仰の基礎たる十字架を負ひて耶蘇に随従する勇胆あるか否は之を外面より批判するは少しく早計たるを遁かれざるべきも信者は外の批判を聞くに耶蘇信者は自身一人を文化の極致のやうに心得、他の朝鮮人を軽蔑して耶蘇教徒となれる上は、何人の束縛をも受けず自由自在に闊歩し得るものゝ如く高く標置し居りて、天主教徒と新教徒の信仰は実に天淵の差ありと。其当否は姑らく措いて論ぜざるも、要するに旧教は胡椒丸呑を尊重し新教は理智的信仰の如く何れか神旨に適するか。兎に角這は教役者の如何より来るもので決して信徒の罪にあらず。寧ろ最初に伝道し（43 頁）或は之を牧し之を培ひたる人の責任であると思ふ。茲に翻つて間島の新教信徒は数千名あり。宏大なる協会は十数個を算するも真に十字架の教の神髄に頭を垂れ有難涙に咽ぶものそれ幾人あるか。毎日曜日には満堂立錐の余地なきを見ては如何に耶蘇教の盛大なるかに驚くの外ないが其実、真の信者即ち洗礼を受けたるものは大略十分の一二に過ぎず、他は悉く教会の教籍に其氏名を登録せざる未信者所謂信仰埒外の人であると云ふに到りては再び驚くの外はない。斯く言はば牧師若くは宣教師に対しては誠に気の毒千万ながら伝道に際して希くは御国気質を抜きにして天上の天国を地上に現出すべく耶蘇の心を以て我が心として人の子を愛すべきことを、さては又何人も其伝道振りを非難するの余地はないと思ふ。朝鮮内地に於ては勿論、朝鮮人にして何れの地方にあるも既に朝鮮人たるに在りては仮令間島に居住すとするも日本とは切ても切れぬ関係あれば其日本を本位としての伝道布教を為さんことを切望するのである。今予が朝鮮伝道を決心したる時の心理の如何を想到するに主の福音を宣伝し其霊魂を救丞すと云ふに在りて其間に何等の野心、何等の欲望を有せぬ。要するに人の子を善良化せば即ち我が目的到達せるので其他何者も無い。恐らく今日の各宣教師も予の告白を目して誤解と為さゞるであらう。然るに間島にては往々宣教師非難の声を耳にするは誠に気の毒に耐へぬ所たるのみならず、又耶蘇教其者の為に迷惑至極であるから時々宣教師諸氏に代りて釈明し若しくは弁護し一方、耶蘇教宣教師の政治的運動特に布教団の内政に容啄せず否却つて其教府に奨順すべく時の如何に論なく等しく人を教化すべく慫慂すれど毎々之を裏切るの行為多く其弁明に困惑したること尠なくなかつた。間島に於て万歳騒ぎ若くは独立運動に加担したるものは其教派に新旧の別なく何れも朝鮮内地より移住し間島にて信者となつたもの多く且つは彼の受洗者よりも未だ洗礼を受けざるもの多数を占めて居た。自ら耶蘇教徒と称し一方世人より信者と見做さるゝ以上は耶蘇教

徒か其主動者と目さるゝは蓋し已むを得ぬ次第で併も亦之れ見当違ひも甚しく信徒か信仰心の発露と心得居るものゝ如く則ち其後援者に某々国あり。又宣教師は我等の相談役なりなど云ふをも耳にしたが之は畢竟、空威虚勢を張るの方便かも知らぬが、兎に角耶蘇教其者の為には実に忌々しき申分である。

間島の加奈陀派のミツシヨンと信徒の各教会とは其(44 頁) 経営の上より観察すれば悉く独立自給である。就中朝鮮に於ける各長老の老会より派遣の伝道者にして布教に従事するもありて外国宣教師か教会統治に関しては幾んど其機能なきものゝ如く言はゞ客分にして帝教儀の保護者である。然るに最近信徒は近代的否現代的思想に染化し「何でも新しきもの、蚊んでも新しき者が善く旧いものは善くない」と称し旧き自己の身体に新き思想を注入せんとしつゝある。されば信徒は某宣教師が公然自分を罪人扱ひにし教義一点張りにて束縛せんとするは時代後れと評し、又或者は宣教師の駆逐説を高唱し更に或者は長老政治は前世期の遺物なり。長老政治にして若し善政なりとせば壮年を挙げて悉く長老と為し我等に宗教を議するの機能を与へよと絶叫するを見るに到つたが、折角幾多の宣教師が万里の波濤を越えて異邦に来り熱心に伝道する勇気と其教旨に忠実なるに想到せば真に気の毒千万であつて恰も飼犬に足を噛ぶられたるの観に耐へない。之れ日韓併合と同時に宣教師諸氏が其伝道方針を一変せず、又彼の米国ウイルソン氏の民族自決説を布教の方便に供したる結果に外ならねば、今日信徒が其母たるミツシヨンに対して云為するは当初より伝道方法に注意せざるの失誤に原因するのであるまいか。加奈陀は我国と特種関係ある英国の属領にして所謂異心同体の間柄なれば真逆に排日を主張し、又之を信徒に鼓吹したる次第でもあるまいと思ふが、一体米国生の宣教師間には米国気質を全然露骨に発揮し時にはワシントンやリンコーンを事例に引張り出し、或は清教徒の勇気を艶説するより自然的に之が威化を蒙りて不逞徒輩の汚名を受けたるの信徒も尠なくない。若し予が宣教師諸氏の地位に立つゝありとすれば、予は信徒に対して政治的運動より生ずる諸多の誤解を避くべく努力せしめ且つ平和の裡に信仰を持続し相延いて生活状態の向上を促進せしめたであらう。斯点に於て予の思想は陳腐なるやも知れざれど這は確実に耶蘇の御心であると信ずる一言にして之を掩へば耶蘇即ち救主を宣伝すればソレで足れりとする。

間島の耶蘇教徒間に頒布されて居る宗教的新聞雑誌を見るに天主教には京郷雑誌あり。之は信徒の信徒を堅固となすの外は何物をも語る文字なく、次には半宗半教観の基督新報と神学指南が主なるものにて其購読者は間島幾千の信者中、僅に数十の上に出ぬらしい。又往々内村鑑造氏主催の雑誌或は東京に於ける朝鮮人発行の宗教雑誌を見受くる事もあるが、新聞雑誌及著書より享(45 頁) くる知識の程度は凡そ斯の如きに止まつて、知名宣教師及牧師の高論卓説に接する機会は極めて尠ない。之は一面経済関係にも依るならんが餘りに見聞貧弱なれば要するに井底の痴蛙となるも無理ならぬ次第である。何れにしても新旧耶蘇教徒の為に真面目なる新聞若くは雑誌の刊行は現下の急務である。さもあれ其他東学教に相当の新聞及雑誌を有すれど発行部数は甚だ多からず、従つて信徒の全体に普及し居らぬが、何れの宗教にしても中央機関と離隔せる地方生活の信徒と連絡を訂し相互間の宗教的良心を温め且つ其信仰を維持すべき楔子として雑誌及新聞を閲読せしむるの必要あれば此点に最善の努力を払ふは中央機関の義務であると信ずる。

間島には仏教の寺院も朝鮮人の仏閣もなく将又朝鮮の咸鏡北道にあるが如き在家侶の村落もないが之は朝鮮人の宗教心に「仏」と云ふ観念が敢て消滅したる次第でない。併し一方僧に対して生仏とか生如来の如くに尊敬を払つて居れば之と同時に仏教を信じて居るか如何にかと云ふに尊敬もせざれば

信仰しても居らぬ。単に仏教の存在を認むと云ふに過ぎないが、就中然らぬものもある。其原因は仏教其者を否認するに非らずして僧となれる俗人の人格に関する問題にして我が内地の所謂「デモ」の二字が付いて廻り居るが如き始末である。若し此二字を除く去るに於ては僧侶の位地の向上すべきは必然の理数である。咸北の隠城、鏡城其他数郡に散在する在家僧に到りては常民即ち平民以下のものと心得、一般は冷遇を敢てし居るが、此種の僧侶も亦女真の民なりしが生命丈けは救助されたと云ふ観念の下に甘んじ単に浮世の名利を打ち棄てゝ仏門に帰依したる者に外ならぬ。若し尠くとも百年前より朝鮮人が間島に移住蕃殖したるものとせば仏教も相当に弘布し且つ見るべき仏閣も建立されたであらうが、何を云ふも僅かに十三年前より朝鮮人の移住ありて今日の現勢を成し、一面に又耶蘇教も来りて伝道し居るのであるから、支那人側には喇嘛教の仏寺を所有するにも拘はらず、朝鮮人側には寺院もなく多少の信者あれど僧侶なき状態で信者同士が僅に相集りて称名礼拝するの寂寞極まるものであつた。最も五六年前朝鮮内地より数名の僧侶来りて布教を開始したる時は相当多数の信徒も現はれたが、其僧侶の退去以来は遽然として父梵唄の音の聞えずなり。幾んど其声息をも耳にせざる事となつた。乍併仏教の潜在力は依然として消滅せざれば彼等の信仰は偏に名僧知識の来錫して其心霊的仮睡よりの喚起を待ちつゝある状態である。（46 頁）朝鮮の僧侶も近来頗る時代に覚醒し来れるは予の如き門外漢にありても大に祝福を惜まざる処である。蓋し仏教の弘布も亦大事業にして到底一朝一夕の能くする処でなければ急速に其効果を収めんとするは頗るの難事で之には其人材を得るの要あるは勿論、又多大の資金に俟たねばならぬ。翻つて日本仏教界の現状を見るに海外の邦人を主とし、兼ねて外国人布教を目的として所謂異域の海外伝道に従事し居る者あるは素より異議ない処であるが、日韓併合後多年を経過せる今日に於て朝鮮人に対し専門的に積極的に仏教を弘布するか、否朝鮮仏教の再興を試みるか、此両者の選択には深き考慮の必要即ち内急外緩あると云ふかも知れぬが、特に万歳騒後の朝鮮人の思想は著大なる変化を来し哲学とか宗教とか云ふ形而上の学術に注目するに到りたれば、兎に角此機会を逸せず日本仏教徒は朝鮮仏教徒と協力して朝鮮人の思想界を統治すべきである。之れ独り仏教徒の責任に非らず。日本に於ける耶蘇教は外国人が幾十年の久しき辛苦布教したる為め今日あるを致したのであれば其御恩返しとして朝鮮に於ける外国宣教師と協力し又其補助としての伝道責任があるまいか。耶蘇教、仏教の何れに於ても忽諸に付するを得ざる場合であるが、内地人は兎に角斯点に着眼せざるかの如く感ざられる。之れ又予の見当違ひかも知れぬが、強ち予の卑見を以て尚早とし或は三文の価値なしと決して断定せらるまい。

次に邦人即ち内地人の間島在留者は多分一千五百名以上に出づまいが、就中七百余名は龍井村に存在し相当の発展を為して居る。仏教としては曹洞宗の布教所あり。其主任僧侶の来住と相前後して大谷派本願寺開教師上野與仁師が着任した。之にて自力の僧一人、他力の僧一人、都合二人が僅々二千足らずのの内地人布教に任する事となれるは頗る異様の威がある。之は一応其理由を承知せぬ者も何人にも起らざるを得ざる疑問である。上野師の説明に依れば専ら朝鮮人に真宗の教儀を弘布し其功績に依りて所謂内鮮融和を計るとの事であるが、仏耶二宗は相異なれど其布教の着眼点に到りては予の意見と合致せる為め大に同意を表し、同時に互いに相和し相睦みて各其目的に向ひ進行すべきを約したのである。併も其後の開教伝道振りを見るも当初の宣言の如く朝鮮人を主に内地人を従とし則ち内地人にして同宗に帰依するものは喜んで之を迎へ、又他宗派の仏教徒にしても同師の布教計画に賛成し援助する者は教友として提契すと云ふ。遣り方で同師も朝鮮人に対する布教には通訳（47 頁）を用ゐるも多少仏教の素養あるものは乍ち之を会得し日尚ほ浅きにも拘はらず毎日曜日には朝鮮人男女約

二十余名が法筵に参詣する。此二十余名は寔に僅少に相違なきも其胸中に潜在する信仰心の発露に外ならねば、従つて事業費を寄付し或は家屋を無償供給したるものもあり全く前途有望である。特に又日師は本職の外に医術をも事とし柔道の心得もあり、其他の遊技にも長じ多趣多能の日となれば之を方便として朝鮮人の霊肉を救拯しつゝあるに到つては異教徒の予も一方ならず敬意を表せざるを得ない。それ斯の如く多方面より朝鮮人の帰依を吸収せんとするもの其前途の如何は蓋し之を予測するに難からぬが真宗と朝鮮の自力仏教とは其信仰に相違あれば是等の点は大に開教師の留意すべき事である。

既述の如く朝鮮人の思想は日に／＼進歩し否変化しつゝあるは誠に結構の事であるが、此動揺の間に処して教化の効果を収めんには蓋し又大政治家の力の手腕を要するや論なくされど、人の心中に潜在する大勢力は即ち宗教にして教育は第二なれば、此宗教の力を以て内鮮融和を図るは宗教家の本分なれば其宗派の論なく互に其目的に向つて進行すべきである。併し結局間島の宗教は東学教対耶蘇教、東学教対仏教の競争となり、他面に耶蘇教対仏教の競争となるべく要するに間島の野は三宗教が各一方に割拠して教勢の覇を争ひ三角競走となるは勢ひ免かれ難き事であらうが、最後の勝利は果して何教派の手に帰すべきか真に刮目すべき問題である。

尚ほ一事の注意すべきは宗教家も教育家も将又政治家も各其見地より常に口角泡を飛ばして内鮮融和を唱道しつゝあるは是認すべきも、日常内地人の朝鮮人に接する没常識な種々の態度を一変せぬ限りは実に子等の高唱する所謂融和を裏切るものである。されば内地人の融和を宣伝すると同時に一面是等裏切の跡を絶つべく留意し之を具体化したきものである。

第　三

間島在留朝鮮人を仮りに三十万とせば就中、我が内地人側の所謂学齢児童に相当するものは約八分乃至一割と見做すも二万四千乃至三万人にして、若し之に中学初期に相当するものを加算すれば頗る巨数に上るべきは言を須ゐざる処である。然るに小学校生徒は姑らく置き中学生に到りては家庭の事情及学費の都合等によつて朝鮮若くは日本内地に赴き入学するものゝ甚だ尠なきを見れば抑も是等の学生は何人の手に依りて如何な（48 頁）る教育を受けつゝあるかを研究するは頗る重要の事に属し我等内鮮融和の主張より見ても大に心得置かざるべからざる力点と信ずる。併し予は教育専門家にあらざれば其所見は多少他と異なる処がある。這は予めお断りをして置く。

朝鮮人児童の教育機関は間島に頗る巨数に又其教育を引受けんとするも、尠からず所謂一人娘に婿八人の観ありて之は到底朝鮮内地に於て目撃するを得ぬ現象である。則ち先づ朝鮮総督府の主義方針に立脚せる普通学校と之に属する各村の書堂あり。之に対抗して支那学校即ち官立高等小学校附設の国民学校と其系統を有する私塾がある。次に新旧耶蘇教の外国宣教師経営の学校あり。加之朝鮮人が朝鮮人教育の方針にて建設せる学校も存在し又耶蘇教の某々種類の学校、東学教の学校等其他宗教の色彩を帯びざるを標榜する学校及び個人的の書堂ありて、右は何れも朝鮮人教育の任に当つて居る。

間島にある我が普通学校は四校にして之に付属する書堂は約三十七八を算する。右両機関の生徒を合計すれば約二千余名なりとの事だ。支那側の国民学校も此普通学校と対抗上幾んど同数位なるも其収容生徒の実数は約三分の二以下である。之は支鮮の別なく混合教育を施して朝鮮人を支那化すべき方針にて努力し居るも如何せん入学生徒は甚だ尠ないが、其理由は支那風の教育を受けんか其郷里父兄への通信も支那文を以てせねばならぬが、さては誰れ一人として読み得るものもない。如斯不便の

教育は絶対的不必要と云ふにあるらしい。此一言を翫味する時は直に其心理状態の告白たるを知るべく如何にも彼の混合教育の可否の半面を物語つて居ると思ふ。外国人経営としては一中学と一女学校あり。朝鮮人経営は小学校四校と各村設立の小学校類似の機関七十五、非宗教的の一中学校がある。之にて朝鮮人の教育熱が如何に高度に達し居るかを知るに足るであらう。実に一昨年討伐以前には普通学校と国民学校を除くの外は他に見るべきもの尠なかつたが、其後鮮内地と同様に朝鮮人の向学心増長と与に、学校は恰も雨後の筍の如く簇出し之と同時に又朝鮮人の思想にも一変化を来したのである。此思想の変化は世界的に見ればソレまでゞあるが之に対して我が教育家は如何の態度を取るべきか。抑も是等向学心の発達は朝鮮内地も然り間島も亦同様で、這は確実に独立即ち武力独立は到底不可能と観じたる其一種の反動であるまいか。若し然りとせば前題の教育熱とか将又向学心と云ふものは共に三文の価値もない、収（49 頁）るに足らないと云ふより他に表現する処ないであらう。何んとなれば教育の最大目的は人を作る。即ち真の人を作ると云ふに存する。

独り間島在留の朝鮮人のみならず、何れにある朝鮮人に対しても日本が日本主義を提げて之を教育するには何人も亦異議なく首是すべき点である。支那が領土の広狭よりも寧ろ教育を以て無形の領土を占有せんとするは少しく不合理と言はねばならぬ。外国宣教師特に新教の宣教師に如何なる基調に従ひ朝鮮人子弟を教育すべきか。朝鮮人の属する国の主義に遵応し之に基督教を加へて其教育方針となすは当然であらう。更に朝鮮人が自ら其子弟を教育するに当つて如何の方針に則るべきか。現代政府の主義方針に背馳せず且つ人種の区別消滅を最終の大目的に心掛けて教育すべきであると思ふ。徒に民族自決とか其他亡国の事例を引照して悲歌慷慨を気取るなど、兎角脱線せざるの注意は肝要である。斯く云へば或は朝鮮人が日本人たる見地より打算せるもので、試みに其地位を転換し朝鮮人として観察すれば蓋し我等と同一歩調に出づべしとし、解駁する者あるも知るべからず。否現に如斯所説を耳にする処である。之れ一応の理なきに非らぬか。教育の容義は英国風に云へばジエントルマンを作り、又日本的に申せば人物を作り、耶蘇教主義にては真の人を作り、儒教の説く処は人倫を明かにすとして、東学教的には天即ち人の真髄を得たる君子を作ると云ふに帰着すれば決して無暗矢鱈に新思想なるものを生徒に注入し我能事了れりとすべきではない。予の見る処に依れば今や朝鮮人の有識者は無分別に学問熱に浮されて上ツ調子となり、恰も脳水症患者の如く脳は次第／＼に膨張すると同時に之が半比例的に手足は削痺して力を失ひ終には全体の調和と均衡を減じ歩行困難に陥るなきを保せぬ。之れ徒に空理に馳せて産業の実利を顧みざる結果として他日当然受入れねばなるまい。

間島に於ける朝鮮人教育の当事者に一言すべきは普通学校と云へば、即ち内地の小学校で英語のコンモンスクールなれば其生徒は取りも直さず小学生にして、之を訓育する先生は言ふまでもなく小学教師である。されば此教師任命に対しては相当の注意を払ふ関係、一定の資格を有するは勿論の事であるが、他の小学校と又之が類似の学校教師にも資格を要するは云ふまでもなきが、後者は前者に比して最も有資格者に欠乏し居るのである。一体朝鮮人は実即ち内容の美なるよりも名の美即ち外観の美を好む有通性あるではあるまいか。特に出藍の（50 頁）言葉はあれど常に生徒より先生はエラクして生徒は其師に勝らざるを常とし居れば、兎に角一定の資格有する優良の教師を選択せざる限りは朝鮮人の有通性を満足せしむる能はざるのみか、到底出藍の誉れある生徒を出すことが出来ぬ。真に心から子弟を教育せんと欲せば先づ良教師の選択に意を用ゐるは一大条件である。併しながら現在学校経営の経済難より教師の選択に累を及ぼすは朝鮮人に取りては蓋し止むを得ざる事とは云へ一夜作りのものに大切なる子弟を託するは断じて盲者か盲者を手引きする非難は遁れ難い。学術品行共に優れ

て多数子弟の教育に適する人物を採用すべきである。斯くて始めて世界的生存競争の檜舞台に於て輸贏を争ふ未来の国民を造成するに足る。

次に教科書問題に付き一言すべし。普通学校所在地と其付近の教育機関は範を同校に取りて学科課程を定むるものゝ如きが就中生徒の脳力に不相当な六箇敷き学科を課するもある。一例を挙ぐれば算術は普通学校のソレよりも高程度なれど、却つて理科は程度低く普通学校には英語科なけれど他の高等小学校にては英語を課し又日本語の教科書を用ゐるも普通用語は朝鮮語で更に中学生には支那語を課し即ち日鮮支英の四国語で学科とし居るが、這は普通の中等教育の過程としては餘りに過大に失し、徒に生徒の脳力を消費せしむるにあらざるかを疑はる。其教科書としては総督府出版の朝鮮語読本を正科用に供し、歴史は何れの学校にても韓国時代出版の者を用ゐて居る。中学用教科書としては朝鮮語出版に乏しき為め日本文出版を用ゐ居れど就中支那教科書を採択し居るも見受くるのであるが、如斯区々として統一する所なく従つて教科の程度は一定せざるのみか、相競うて其程度の向上にのみ腐心する嫌ひある。之れ又徒に生徒の脳力を消費せしむるの損耗以外には何等の利益もないと思ふ。最近是等の学生にして朝鮮文の中学程度の講義録を読むもの又日本内地より同様のものを講読する向きも尠なくないと与に絵画講義録杯を繰返すものもあるが、右は総体に抽象的の学問を嗜好するの癖に陥つて居ると思ふ。

女学校として専門的機関は間島に二校あるのみで一は外国人の経営、一は朝鮮人の手に成つて居る。我が普通学校に於ても女子部を併設し居るが女子教育に大に心を用ゐるは頗る結構である。元来朝鮮人女子としては其貞操を完うせしむべき、一方便として教育の必要なきものとされ則ち社会より全く幽閉の状態にあつたが、既(51 頁)に女子教育の必要を認められ且つ之を奨励する時代となつて来た。斯く朝鮮人女子も幽閉的状態より開放されたので何時しか女学生も高壇に起つて、女子解放論を喃々するやうになれるが一体女子教育は男子教育に比して未だ進歩せざるものゝ如く之れ又已むを得ざれど時には突飛極まる新人なども出づるか、見聞の狭き間島にては大に共鳴し称賛の辞を吝まざるものもある。乍併教育の要は一家の主婦即ち母となり子弟を社会に出して一人前のものとすべき土台を作るの義務を尽了すればそれで足れりとすべく、之を標準として教養する勿論であるが、時には女子の本質を忘れて猥りに政治論や法律説を担き廻るもの、中等教育時代の女子及び小学生にもありとか、其是非の如何に就ては既に定評あれば事新しく茲に述ぶるの必要はない。要するに這は過渡時代に於て遁がれ難き現象で何れの国土、何れの地方に於ても往々見聞する処である。是等脱線的奇状に陥らざるべく教養し世話する者なきに於ては女子教育も同様の始末である。

最近龍井村の耶蘇教徒は其教会室に幼稚院を新設し幼児の保育を為し居るが、収容幼児は僅に男女二三十名未満である。放逸たる家庭に幼児を放任して置くよりは幼稚院に寄託するは勿論、数倍の効果あるべきも現在は其保母に適任者を得ざるものゝ如く、之を一言に概評すれば幼稚院と云ふよりは寧ろ児童預り所と云ふの観あるのみ、他に云ふの適切の辞を知らない。

書堂即ち普通学校に属せざる書堂の各地に散在するは其実数若干なるか知るを得ぬが、先づ一村一堂と見て差支なく、さては二百五十以上に達するであらう。此書堂は朝鮮内地の旧書堂とは何等の変化を見ず。山間の僻地にあるもの若くは普通学校に入学し能はざる事情ある者の為には必要である。仮令其学習する処は千字文或は童蒙先習、更に進んでは通鑑の類ひに過ぎぬと雖も惟ふに其効果は没すべからざるもの (で) あらう。支那人間にも識知学堂と称し之に類似する機関ありて其教授法は略々彼此れ相似し居れど朝鮮人側の如く多数ではない。蓋し之は支那人個戸数の少なく且つ其人家が一地

域に密集し居らざるにも基因するであらう。則ち朝鮮人側の五戸には所謂五戸の邑に必らず識字先生なる者ありて文字を教授して居る。斯の如き始末なれば朝鮮人側子弟には比較的識字者多く、従つて立派な学校を建設し居るので子弟を教育するには是等の基礎を有する為め誠に好都合である。されば斯点に就ては寧ろ村落に在る書堂を(52 頁) 改良し旧新の調和を保ちて経営するは至極簡易にして一面其効果尠からざるべく信ずる。

青年会事業は最近大流行の傾勢ありて各地方に設立され間島にても既に十二を算して居る。就中宗教的色彩を帯ぶるもの最も多きを占め、其目的とする処は普通の青年会其者と一般にして差したる異色を見ないが、独り万国基督教青年会分会の目的は名称の通り万国共通を標榜し居るも、幾分か地方的特種の使命を有するものゝ如くである。他に又非宗教的の青年会もあるが、何れも青年壮年の集団なれば其行動や思想が活気溌剌気炎万丈当るべからざるものある。されば此を統治し秩序を維持する者の責任は決して容易なるものではない。斯く間島に青年会の族出するに就ては其主義方針の如何を問はず茲に青年連合会なるものを組織し是等幾多の群小青年会を連合統率すべき必要あるが、這はソレ誰の責任であらうか。

間島の一二都邑に於て夜学校を設立し子弟を教養し居るものある。其実数は未だ四五を算するに過ぎないが、相当の生徒ありて其教科は読書、数学、語学、筆記及び商業法である。

体育問題に就ては近年間島在留の朝鮮人も大に覚醒し来り体操は言ふまでもなくテニス、ベースボールを始め其他体育に益する種々の運動に熱中し、加之日本の柔道をも練習し居るものある。元来日鮮人の体育如何を比較するに朝鮮人側は概ね其体格良好にして、特に彼の西諺の健全なる魂は健全なる身体に宿ると云ふソレを体現すべく運動するので、斯くては所謂鬼に鉄棒である。翻つて日鮮婦人の体格を対比するに、之れ又日本婦人は甚だ劣等の観あり。更に西洋婦人に対すれば一層の貧弱を発見せざるを得ず、茲に於てか日本婦人の体格改良の必要は切々痛感せざるを得ない。

間島に於ける朝鮮人と日本語の関係に就き一言せざるべからざるが彼の万歳騒ぎ後、普通学校生徒の遽然として退校せるもの多いのは其原因たるの即ち日本及日本的教育を嫌忌するにあつて、当時日本語を解する者も俄かに世間を憚りて、一切之を口にするなかりしは最も有力なる証拠である。大局より見れば真に之れ一笑に付するの外なしと雖も、当時は蓋し已むを得ざる事情に余儀なくせられたるものであらう。爾来漸次改善されて恁る固陋の見より脱出し来るは慶ふべき現象である。目下各学校にては総督府編纂の教科書を用ゐ、却つて其供給の不及を嘆じつゝあるのみならず、其他林博士の代(53 頁) 数学英和辞書を机上の支とする生徒もあつて、大に其面目を一新し且つ日本語を用ゐるものも多くなつた。彼の咸北に日本軍隊の入りしは明治三十八年にして同十一月より豆満江沿岸の村落に於ては軍隊奨励の下に不完全ながらも日本語の教授を開始したが、爾来既に十数年間を経過し、又其後総督府の推奨とによりて日本語を解するもの漸増し来れるは蓋し当然である。されば当今総督府の教科書及び其他日本語にて編纂せる書籍を採用し其教科書中に加へたのであるが、其理由は種々あらんも第一に学問熱に浮されたる同学の徒は朝鮮文編纂の良書なき為め自然に日本語に傾斜を余儀なくされたので、当時若し朝鮮文編纂の良書ありしならんか必ず之を採用し日本語は一の語学として研究したであらうと思ふ。又間島にては支那語の必要もあり日本語の必要もあるが朝鮮人分布の関係上、何れの研究を先きにし何れを後とすべきに就ては今軽々に断じ難きも日本の勢力降及し其保護十分なる地方にあつては日本語の勢力あるは当然の次第であるも、往々学科中に未だ日本語を加へ居らぬも見受くるは之れ一の必須科として教授するを欲せざるにも基因するのであるまいか。今や斯の如き状

勢なえれば何れの方面より観察するも朝鮮人間に一層日本語普及の必要あるは云ふまでもなく、彼等が学問熱に浮されつゝあるに乗じ善良なる書籍を供給して其知識欲を充実向上せしむると同時に不知不識の間に内鮮融和の実を挙くるは教育に従事する者の重大責任である。

以上に予の狭き見聞に属するものであれば往々誤謬の点なきを保し難い。之を総括すれば間島に於ける朝鮮人経営の教育は確実に統一を欠いて居るが、开は一に経営者の意見相違より来る結果なるも其統一の欠如は教育界に取つては決して等閑に付し難き問題である。自由気儘の我を捨てさせ如何にかして其統一を講じさらんか。其教育方針は必らず乱麻の如くなるは疑問の余地はない。誰れか此統一を企画すべきものぞ。惟ふに内鮮教育家が茲に須らく小異を捨てゝ大同に就き相接近するは唯一の良策たるべく信ずる。又誰れか此統一の端緒を打開すべきものぞ。敢て我が官憲当局に対し借問するのである。

第　四

予は既に間島に於ける朝鮮人の宗教及教育に関する見聞を最も露骨に記述したのである。更に右の記述に立（54 頁）脚し当事者に対して予の意見即ち希望を開陳して本稿の擱筆を為すべし。特に予は当初諸氏と同様の地位に立つべきを弁明したるが、今尚ほ立たんとする者なれば更めて斯点に注意を払はれんことを希求し置く。

外国宣教師は主耶蘇の遺名を奉じ福音を世界に宣伝すべく辛苦艱難に耐ゆるの勇気と愛の偉大なるには予も心から感動せざるを得ない。取分け身親しく之を目睹したるものに在りては人一倍の同情を禁ずる能はざると同時に、一の大なる希望を提出するのである。則ち福音の外には何事をも為さずとは外国宣教師の声明なれど其補助的方法として教育機関の経営を為すも可、産業開発を指導するも亦不可ないが、之が施設に際し彼の所謂人気取り法は絶対に廃止されたきものである。是等人気取りは時に或は失敗に帰して布教上に累を及ぼし即ち耶蘇教の価値も就き教外の人の非難を蒙るは現に昨年及一昨年将又其以前から屢々伝聞する処である。由来宗教に国境なしと云ふも国境有無の問題は姑らく措き彼の民族自決を云為するならば宣教師諸氏の駐在し居る領土又は民族は現在日本統治の下にあれば諸氏は主に忠実なる僕を作ると同時に主権者か耶蘇教に迫害を加へざる限り之に服従すべきは教役者の義務である。仮令迫害されたりとせんも教儀の為に殉ずるは福音を伝うるものゝ正に踏むべき正道であるまいが、若し宣教に従事するとせんも此態度を持して猛進すべき決心、且つ其希望を有するのである。又諸氏の教養せる朝鮮人の牧師伝道者にしても恩師たる諸氏の行動に倣ふは勿論でヨモヤ主に忠実たるを拒むものないであらう。之を一言に評すれば朝鮮人牧師及信者は或者の扇動によりて上ツ調子となり全然着実の美点を喪失せるが如く看取さるゝのである。之れ相延いて諸氏の経営する教育事業累を及ぼし等しく耶蘇の名を冒涜するに到るべく信ざらる。宗教に関係を有せざる朝鮮人教員と東学教に関する教師並に其教儀を宣伝する人々の事業其者は素より神聖にして敬意を表するに吝さかならないが、其思想の時勢の為に動揺して上ツ調子となり一にも宗教、二にも教育と猥りに注入をこれ事とするも元来宗教若くは教育上の効果なるものは早急に実現するものでない。一夜作りのものは反つて宗教と教育の進歩を阻害する。されば互に多数の生徒収容の争覇を名誉を為さす内容の充実に着目するは最も緊要且つ急務にして又他より同情を得べき捷路である。（55 頁）が隊列を整へ喇叭を吹き途上を進行するは聊か示威の感なきに非らざるが這は教育の充実には何等の益する処なく却つて人の物笑ひを買ふのみである。

東学教其他檀君教の盛衰は一に其人によりて存する即ち人格の崇高なる有徳の士を要するはソレ自身既には非難の声の頗る高きものあるが、這は要するに政治的盲目運動より隔離し得ざる為である。是等現在の宗教の生命は幾んど政治的色彩であるから、其政治的運動の消滅したる時代は東学教等の真価の発揚する。即ち其復興時代であらねばならぬ。されば宗教として東洋否世界に布教せんと欲せば反政府的行為を絶対に禁止するは極めて必要の条件であるまいか。敢て世人の一考を煩はすのである。之れ予の希望にして且つ意見である。誤解し居るか否歟。

付録２

支那に於ける漢字制限の話

在間島　渡邊薫太郎

漢字の本家は云ふまでもなく支那であつて、それが最初造られた時と今とは、字形も異り字数も相違して来た。即字形は簡略になつたが数は漸次増加して、現今支那で使用して居る字数は大略二万程あるし、日本では一万五千に近く、朝鮮に於ては全龍玉篇に現はれた文字は日本の辞書にあるよりは少ないのである。現今支那に於ては、化学上の術語、例へば加里とか那篤漠とか云ふ流儀の新語を用ゐて居るので、新に文字を作成しつゝあることは、日本の人力車を俥とすると同様可なり多い。所が朝鮮では従来新字を作成しなかつたが、メートル系の文字丈けは造つてあること、日本と同様である。

支那に於ては、前述の如く、文字の数が二万以上もあるから、之を自由に駆使し、適字を適所に用ふることは、学者か相当教養のある人物以外には頗る困難である。従つて、電報などを打つ場合には、「電報新編」とか云ふ辞書に依つて、其の範囲内の文字を使用して打電することになつて居る。此「電報新編」に掲載された文字は凡そ九千字であるが此の九千字丈知れば、北京官話なり白話即ち俗語を以つて書いた文章を自由に操り、また打電することが出来るのである。然し之れでも尚ほ多きに過ぎると云ふので、現今学生用の辞典には約八千字を載せて居るに過ぎない。

然らば日常支那人同志が用ゐて居る文字は、実際幾字位かと云へば、或る支那人の説に従へば、支那の小学堂の教科書に掲載した文字は僅かに二千五百字程で、之を用ゐて居れば、日常の談話に毫も差支ないとされて居るとの事である。然しそれ丈けでは詩を作り、或は立派な古文を真似て書く事は、全く不可能であつて、白話を綴るのに差支ないと云ふ程度である。

故に達見の人々の間には、漢字圏の人間であり乍ら、之を廃するか又はアルフアベツト系の文字に改めるか乃至は漢字の使用を滅ぼさねばならぬと主張するものが漸く多くなつて来たのである。

就中、教育家は多く白話万能説を主張し、新たに白話文法や白話文範を編纂して国民を教育し、それを以つて六敷しい漢字の為めに文盲にされて居る多数の国民を救済せんと企てゝ居る。此の運動は我が国に於ける新聞その他の漢字制限運動と同一に考へらるべきもので、比較的漸進的穏健なものであるが、同時に、全然新たなる文字を創作し、注音法即ち国語を自由に文字に綴らうとする表音文字採用論があることを忘れてはならない。（裏面凸版参照）此の主張の下に創作されたものは、極めて単簡な記号文字であつて、その記号には少しも意味がなく、我が国の仮名に類するものである。民国教育部では、之を広く全国に用ゐしめやうとして、現下その講習に尽力し小学生に之を教授して居る。話が少し傍道へ這入るが元来支那領土内には非漢の民族が決して少くなく、就中西蔵、蒙古、満洲等

の民族は皆アルフアベツト系の文字を採用して自由自在に表音し転字して居り、朝鮮では可なり古くから諺文を用ゐ、日本では仮名を用ふる等夫れ夫れ手段を講じて来たのであつた。民国の教育部が此処に大英断を以つて注音法の採用に志したのは、あの複雑な漢字を一般の使用から駆逐し、表音記号を綴り合せて文章を綴り得るやうになれば、満蒙日鮮語と同じくその使用の範囲が更に拡大されることとなるであらうし、又民国の文化の促進に貢献すること、著しいものがあるであらうと考へられる。一例を挙げるならば電報は、最早「電報新編」の必要を認めなくなり、そのシグナルさへ改良すれば、辞書を用ゐて電文を書いたり、辞書を用ゐて電文を訳したりする手数を要しなくなる訳である。

又支那には、矢張りローマ字論者もあつて、最近の辞書には、在来の反切を廃し、同音の漢字を以つてその音を表はし、更にローマ字を付したものもある。此のローマ字は新たに創作された注音法に比して学生間に多く便利として使用されて居る。

マールボロウの支那語独習書には次の如く書いて居る[29]。

There have been, and are, many system of representing Chinese symbols by Roman letter. This is called "romanization" and while one or other of the system is used by every foreigners conversant with Chinese and by Chinese taught in mission school, the Board of Education has not yet introduced any system of phonetic spelling into Chinese Government schools.....(Darroch 1916:2)

Sir Thomas Wade's system is that need by the Consular and Customs services in China. It represent northern Mandarin sounds with such fidelity that those accustomed to use it find perfectly satisfactory. Wade's system was prepared for the use of the English student, already familiar with the phonetic values of the letters used, who woud, presamably, have a Chinese teacher at his elbow to aid in the elucidation[30] of any difficulty that might arise.

The second, called "The Standard Romanized System" was prepared by a committee of the (missionary) Education Association of China. Its aim is to teach Chinese illiterates to read their own language in Roman letters instead of in the cumbrous native character. It has been found to be so successful that a bright scholar will master the system and read any book printed in Romanized Chinese after a month's study.(Darroch 1916:3)

漢字は学者や官吏や商人には解るが農民と労働者は皆目解しない。その比例は文字を解するもの三に対して文盲者七であると云はれて居る。その原因は要するにそれを駆使し得るに到るまでには幾年かの歳月を費さねばならぬからで、農民や労働者は生涯之れを学ぶ時間の余裕を持たないからである。朝鮮に就て見ても、漢字を以つて姓名を書き得ないものは約千分の十位であつて、支那人よりは文盲者が少ない。之れは古来から鮮内到る処に書堂があつた賜であらう。然し、支那人はその比率こそ少ないが流石に漢字圏丈けあつて、文字を解する者は文字を知ることが深い。朝鮮人はその比率に於て支那人を凌駕して居るが、文字を知ることが浅いのは事実である。

話は前に逆戻りするが注音法は、元来中華民国の創作ではなく、実は清朝の末に作られたもので一度全国の小学堂に対して其の教授を命じたのであつたが、当時国民の自覚が未だ其処まで及んで居なかつた為め、父兄の反対が多く、教師も亦その教授を屑（いさぎよ）しとしなかつたのであつた。然

[29] 引用にあたっては原文である Darroch (1916)に従った。渡部(1922b)には大文字の乱用が目立つ。
[30] 渡部(1922b)では Education となっているが、Darroch (1916)の原文で直しておいた。

るに民国となるに及んで益々国字改良の必要を感ずることが、痛切になり識者は挙つて漢字使用の不便を思ふやうになつたため、遂に民国七年十一月教育総長の名を以つて注音法の採用を発令し、八年四月に再びその規則を制定して支那全土に領布したのである。爾来各種の注音用者書が刊行せられ出して来て各学校に於て教授する迄に傾いて来た。現に小学堂の教科書中には漢字に対して此の注音法のルビを付したものもあるし、基督教のポスター等には単に漢字のみのものとルビ付きのものとが発行されるやうになつた。

然し漢字全廃は未だ前途遼遠である。たとひ現在注音法によつて国音の統一が計画され、国内交通の発達と共に逐次理想に近づくものとしても尚ほ此処に一つの困難が横はつて居る。即ち南北字音の相違が之れである。南北字音の相違は南北政争の如く融知し難い、既に南方支那に於ては南音の統一を謀る。「国語南音統一法」なる運動を云々して居るものもある。思ふに南北思想の相違が深くその根底に横はつて居る以上、支那語の統一国音の一致は至難事中の至難事ではあるまいか。

字音の南北統一が不可能であるとすれば、南京官話は依然として北京官話に対抗して存在し、その影響は延いて各地の土語に及び、遂に標準語たる北京官話を解することが出来ず、同国人間に通弁を要するの滑稽を無くすことも出来ないであらうし、標準的白話（言文一致）を以つて語り書くの理想は何時の事か解らないとさへ考へられるのである。南北の相違は此処にも一の難題として横はつて居る。

それにしても北京官話の通用範囲は可成広汎なものであつて、之れを南京官話に比較すれば、其の差の著しいことは一つの強味でなくてはならぬ。マールボロウの独習書の巻頭には次の如く書いて居る。

Naturally, there are many dialects spoken in different parts of the country and yet there is undeniably a Chinese language current throughout the whole of China. This is usually called the Mandarin or official language and in the spoken language -with local variations- of the greatmass of the Chinese People. Of course 400,000,000 Chinese probably 350,000,000 speak mandarin; the remaining 50,000,000 speak more than 20 different dialects all having a more or less distant resemblance in the official language. (Darroch 1912:1)

何は兎もあれ支那は、今たゞに漢字を持て余して居る計りでなく、字音の相違にも全く手を焼いて居るのである。若し注音法の理想が、予期の如く漢字を駆逐して、国音の統一を実現することが出来るとすれば、朝鮮に於ても日本に於ても漢字は廃され或は諺文となり或は仮名乃至ローマ字とならざるを得ないであらう。

我が国に於ても昨今漢字の制限、ローマ字の採用、新らしい仮名の創作等相ついで起り、その賛否の点に就いては俄かに決定し難い状況であるが、先づ漢字を制限し次で之を駆逐しやうとすることには一般に、略々異存はないやうに見受けられる。漢字を日常の使用より全く駆逐し去るの日は、果たして支那が先であらうか、日本が先であらうか。

（完）

付録３

朝鮮布教の急務

天理外国語学校講師　渡部薫太郎

明治三十八年二月従軍して渡鮮しましたのが、私に取つては第二回目の渡鮮で、夫より引続き昨年五月の半ばまで、朝鮮人の間に起臥し、公私の仕事をして居りましたが、昨年五月下旬、二十年振で内地の土を踏みました。永年朝鮮の特に排日思想の盛んなる地方に居りましたから、其の心理状態を深く解して、又人一倍朝鮮人に同情を表して居る積りで、現今尚大阪方面に居る鮮人の為め間接直接に力を尽くして居ります者です。

所が不斗した御縁で、天理外国語学校に於て今回朝鮮語の教授に当る事になりましたのは、自分としては大いに喜んで居ります次第であつて、慾徳に換へられぬ程うれしう御座います。併し私は朝鮮語を教ふるのが第一の目的ですが、第二の目的としては、後日大任を負ふて朝鮮人間に布教せんとする学生諸君の為め、朝鮮総督府の施政方針なり、朝鮮人に堅実なる信念を抱かしめるの必要なるを、諸方面より述ぶる積りです。語を換へて言へば、語学教師となり又朝鮮案内者たらんことを期して居ります。故に今専ら第二の目的に就き、諸君に御話し申しましよう。

扨太古に於ては出雲族と朝鮮との交通あり、上古に於ては王仁を始めとし、其の他多数の帰化人が来ましたのは、歴史の証する所である、又中古に於ても両国民の往来があつた。近古に於ては、豊臣及徳川時代にも国民の往来があつたし、時代の近くなるに付け、交通も次第に頻繁となつて来ました。明治に及んでは、其の往来が一層甚だしくなり、日韓合併以後は両民族彼此の差別が無くなつてしまひました。

然し朝鮮には三千年の歴史を有して居つて、昔より朝鮮的の文化も大に進歩して居りました。又我が国が其文化に負ふ所も少くない。決して野蛮未開の民族ではなかつたのです。唯其の文化が今日西洋より東漸の文化とは色彩を異にして居つたのみであります。故に彼等口を開けば直に上古の日鮮彼此の比較文化論が出ます。唯文化進捗の径路が、西洋風でなかつたから、今日の私等より見れば異様に見へるかも知れぬが、朝鮮内地には往古の文化を語る偉大な物が沢山残つて居ります。

特に朝鮮は大陸であつて、島国でなかつたから、隣強から屢々圧迫を蒙りましたが、其の結果としては、隣強の文化を日本に先んじて吸収して居る点もあります。中には西洋の文化に日本より先に接して居ります。此の民族が上に善良なる為政者を戴いてゐたならば、国民の文化は益々増進したのには相違ないが、為政者の適当なる者を得なんだ結果、文化の発展を阻止せられ、国民は塗炭の苦に陥り、如何ともなし得ざる状態になりました所、近世に於ては諸外国が東洋の覇を握るには、是非とも朝鮮を占有せねばならぬとして、之を窺ふ者が絶へなかつたのでした。之が原因をなして日清事件となり、統監府設置となり、遂には日韓合併となつたのであります。茲に於て領土の主権は確定して動かぬ様になつたが、人心は如何かといふと、其の向背が確定してゐない。曰ば表面は平和であるが、裏面に於て反日熱の熾んであつた故に、暴徒討伐の不祥事を見るに到つたのであります。此の暴徒の希望は、即ち朝鮮独立問題の根底は極めて深く、現今に於ても大人小児の別なく、彼等は之を口にして居るのであつて、此の希望が間接直接に現はれ、我が施設の障碍物となるのであります。

此の害物は急には除かれますまいが、朝鮮総督府は一日も早く之を除き、人民の福利を増進せんと欲し、種々の方法を講じて居ります。是が総督の本務であります故に、総督は産業に教育に、大いに力を尽し、特に教育の如きは、殆ど内地と異ることなく、宗教の自由も十分に与へてあります。一口に云へば内地の政治と大差がないといふてよろしい。而して総督は政治方面より彼等を統御せねばな

りませぬから、法令に反する者は之を罰せねばならぬ。之は他の善良なる者を保護する道であります。為政者以外に朝鮮人を指導するは、我等日本人の一の義務であるを以て、或る人は教育家となりて渡鮮し、或る者は宗教家となつて渡鮮して居ります。此の両種の事業は誠に尊い者であつて、我等の進んでなすべき者である。教育家の中には個人経営をなす人もあれば、総督府の教員となる者もあるし、又鮮人に聘せられて居る者もあります。宗教家に到つては朝鮮人に聘せられて居る者は一人もない。又朝鮮総督府より聘せられ居る者も一人もない。何れの人も内外の宗教団体より派遣せられて居るのであります。他山の石を以て琢く可しである故に、教育の事暫らく之を抜きにして、専ら宗教方面の事を述べます。

朝鮮の宗教と云へば、仏教、朝鮮教、耶蘇教が主なる者であります。仏教は古来より禅味を帯びた者で寧ろ自力宗であります。朝鮮教は朝鮮人の創始したもので、耶仏仙又儒教の混合教であります。耶蘇教は新旧と希臘教であつた、一番勢力のあるものは新教、次に天主教、次に希臘教といふ様になつて居ります。

此の新教の宣教師たる人の学問の如何は十分に知られませぬが、其の布教に熱心と耐忍の強きと、鮮人に接するに愛情を以てすることは、敬服の外ありませぬ。次に天主教は新教とは若干異り、地中に居るモグラモチの様に隠然動きますから、表面不振の様でも、あなどれぬ努力を以て居つて、熱心耐忍と愛情は新教の夫とは異る点がない。宗教家らしい点は却て旧教に認められます。希臘教の事は私にはよくわかりませぬが、之は萎微不振であります。次に日本の神道と仏教は如何かといふに、相当やつて居ますが、鮮人方面には余り手が拡がつていない。中にはあつても之は少数であります。

次に布教者の事を述べましよう。天主教の宣教師は何れも骨を朝鮮に埋む考へ、即ち再び本国の土地を踏まぬと決心して来た以上は、布教に必要なる朝鮮語を、一生懸命に二年間学び、先輩者より時々試験せられる事となつて居るし、又目的が布教であるから、語学に達せぬのは即ち目的を達せられぬのであります。これは彼等仲間に於て不名誉の事として居ります。新教の方も其通りであるが、両三度試験がまづいと、不適任者として本国に送還せられます。之を以て彼等は旧教の者より其の勉強が如何に激烈であるかゞ分ります。新旧の宣教師にして朝鮮語を自由に語らぬ者は皆無といつてよろしい。翻つて日本の神仏布教者の中に朝鮮語を自由に操り、朝鮮人専門に布教して居る人は幾人かある。恐らく十本の指を折ることは出来まいと思はれます故、日本の神仏宗旨が朝鮮人間で広まらぬのではあるまいかと云ふことは、大に研究すべき問題です。

然して天理教は、外国に向ひて布教せんとの目的で外国語学校を開かれたのは、日本最初の試みであつて、教師も生徒も責任が軽くないのは云ふまでもありません。他の言葉は暫らく措いて論ぜず、私は朝鮮語を教ふる点より論じたき事があります。朝鮮布教師の職責に二方面があり、一方は宗教家として人の霊肉の救済を目的とせねばならぬし、他の方は間接的に日鮮融和の実を挙げねばなりません。此れを揚げずして却て害を残した実例が沢山独立騒動の時に現はれました。これは諸君の既にご承知の事と思ひますが、此の実を揚げるのが今日の急務であります。此れは教育家の手腕を待つことも多いが、私の見る所では、日本人宗教家の双肩に懸かる、重且大なる責任であると思ひます。又、宗教家としては不言実行の範を彼等に示すも一策であるが、唖的伝道よりは自由に朝鮮語を操つり、彼等によく日本を理解せしむに如くものはありません。

故に私は何宗と言はず人類愛を以て彼等の救済と、日鮮融和を目標として進む宗教家の、鮮内地に活動せんことを望んでやまぬのであります。之をなすに要するものは、永年の住居の決心と語学の堪

能及び熱烈の信仰であります。現に朝鮮に於ては新しき宗教の興らんことを望んでおるのであります。仏教も、朝鮮教も、耶蘇教も失敗に終らむとして来た此の機に乗じて、朝鮮に行く者は何でありませう。西よりはモハメッド教、バハイ教が来るが、東よりは何教が進み行くか、現に朝鮮は新宗教を要しつゝ有ります。此の時に当り、其の羽翼を伸長する者は如何なる宗教で、何れの地より出づるか疑問であります。斯くの如き朝鮮の現状を看取し諸君の内より三千万の朝鮮人を霊肉の二方面より一日も早く救済せん為め、多数の布教者の出でんことを望むと同時に諸君に問はんとするのは家族中の大病人と他家の病人と何れを先に救ふ可きか、此れにて私が主張する朝鮮布教問題は尽せりと思ひます。

尚ほ此外に申したき事は沢山ありますが、餘に長きは却つて害あつて言はぬに勝る故、他日の機会に譲ることゝ致しませう。